

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第30集

下桑島西原古墳群

平成4年3月

宇都宮市教育委員会

序

近年、本市においては、交通網の整備に伴い郊外における民間の開発が急増し、これに伴う埋蔵文化財の調査も急増の一途を辿っております。このような状況の中、下桑島町内に宇都宮国際貨物ターミナル（UIC T）の倉庫を建設するにあたり確認調査を行なった結果、墳丘が削平された古墳が2基確認されました。また、その周辺からは埴輪棺、土坑などが多数確認され、当時の埋葬形態を知る上で貴重な遺跡であることがわかりました。

そこで、開発側である久和倉庫株式会社と協議をした結果、当教育委員会が調査主体となり、発掘調査を行なうことにより、この貴重な資料を記録保存することになりました。その結果を掲載したものが本報告書であります。本書が各方面におきまして広くご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本調査の実施にあたりご指導を頂きました県文化課、栃木県立博物館、及び調査にご協力頂きました久和倉庫株式会社に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

宇都宮市教育委員会教育長

藤田昌平

例 言

- 1 本書は宇都宮市下桑島町字西原1200-3番地他に所在する宇都宮国際貨物ターミナル倉庫建設に伴う発掘調査報告書である。
- 2 調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり、久和倉庫株式会社が費用を負担し、1次調査が平成元年10月1日～11月6日、2次調査が平成3年4月15日～5月15日の2度にわたり実施した。
- 3 調査面積は、1次調査時が約2,500㎡、2次調査時が約500㎡の合計約3,000㎡である。
- 4 遺構、遺物の整理・実測等は賀来孝代、大森八重子、大野節子、鈴木芳子の協力を得て梁木誠、今平利幸がこれにあたった。また、遺物写真は横堀聡、賀来孝代がこれにあたった。
- 5 本書の執筆は、第IV章1を梁木誠、その他を今平利幸がこれにあたった。
- 6 本遺跡に関する図面・写真及び遺物の一部は宇都宮市教育委員会が保管し、遺物の一部は遺跡内に建設された宇都宮国際貨物ターミナル内展示室で展示してある。
- 7 発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔指導助言〕 国士館大学 教授	大川 清
宇都宮大学 教授	石部正志
宇都宮市文化財保護審議委員会委員	境 静夫
同	大金宣亮
同	橋本澄朗

〔事務局〕 宇都宮市教育委員会

〈1次調査時〉

〈2次調査時〉

社会教育課		文化課		
課長	塚田隆一	課長	安達光政	文化財保護係長 定岡明義
課長補佐	加藤允夫	文化振興係長	藤田秀樹	同 手塚英男
文化振興係長	定岡明義	文化振興係	湯沢孝夫	同 梁木 誠
同	手塚英男	同	白井成志	同 大塚雅之
同	梁木 誠	同	高橋良子	同 神野安伸
同	白井義雄	博物館建設推進班	白井義雄	同 今平利幸
同	小松俊雄	同	小松俊雄	囑託 吉沢宣行
同	赤石澤亮	同	阿部邦男	
同	大塚雅之	同	青木 徹	
同	神野安伸			
同	今平利幸			

調査補助員 阿久津正代子, 阿久津フミ, 入江ウタ子, 入江タカ子, 入江文字, 入江通子,
入江光子, 宇根キヨ, 宇根トヨ, 黒川テル子, 酒井正子, 白井チセ子, 平岡みね子,
広田愛子, 増淵フミ, 室井ケン, 賀来孝代, 糸永郁美

- 8 なお、発掘調査ならびに本書作成に際し、多くの方々のお指導、御協力を賜りました。記して心から感謝の意を表する。

阿久津勝利, 秋元陽光, 阿部知己, 石橋知明, 岩上照朗, 岩淵一夫, 岩村隆之, 上野とも子,
大沢順子, 大関栄, 大塚久美子, 大橋泰夫, 小川恒夫, 小田垣充雄, 神山悦子, 菊地勝二, 君
島利行, 小林朝治, 小林三郎, 小森哲也, 小森紀男, 斉藤恒夫, 酒井正浩, 佐藤秀雄, 篠原祐
一, 高藤常松, 高野左千流, 滝田八州男, 田熊清彦, 津布染一樹, 塚田幸子, 永井泰幸, 中野
正人, 中山晋, 仲山英樹, 野崎進, 橋本博文, 平根直信, 水野順敏, 三村和靖, 三村剛, 渡辺
礼子, 福田貴久栄, 藤田典夫

(敬省略)

凡 例

- 1 遺構の縮尺は、墳丘が1/150, 周溝断面図・遺物出土状態図が1/60とした。
- 2 遺物の実測図は、円筒埴輪1/5, 形象埴輪1/4, 土器1/3を原則とした。また、土師器断面は白ぬき, 須恵器断面は黒ぬりとした。
- 3 遺物の番号は、本文・挿図・表・写真図版と一致する。

目 次

序 文	
例 言	
I 調査の経過と方法	
1 調査の経過	1
2 調査の方法	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
III 遺構と遺物	
1 1号墳	9
2 2号墳	17
3 南原古墳	32
4 土坑群	36
5 方形溝状遺構	40
6 埴輪棺	40
IV まとめ	
1 円筒埴輪について	45
2 形象埴輪について	45
3 2条突帯埴輪について	46
4 土器について	52
5 小結	54

挿 図 目 次

第1図 遺構配置図	4
第2図 周辺遺跡分布図	6
第3図 周辺前方後円墳実測図	7
第4図 1号墳周溝・土坑断面図	10
第5図 1号墳平・断面図	11・12
第6図 1号墳木棺墓実測図	13
第7図 1号墳箱式石棺実測図	14

第8図	1号墳出土土器実測図	15
第9図	1号墳木棺墓出土直刀実測図	16
第10図	2号墳断面図	18
第11図	2号墳平・断面図	19・20
第12図	2号墳遺物出土状態図(1)	21
第13図	2号墳遺物出土状態図(2)	22
第14図	2号墳出土土器実測図	23
第15図	2号墳遺物出土状態図(3)	24
第16図	2号墳出土埴輪実測図(1)	25
第17図	2号墳出土埴輪実測図(2)	26
第18図	2号墳出土埴輪実測図(3)	27
第19図	2号墳出土馬形埴輪実測図	29・30
第20図	2号墳出土人物埴輪実測図	31
第21図	南原古墳平・断面図	33・34
第22図	南原古墳出土土器実測図	35
第23図	南原古墳出土鉄器実測図	36
第24図	土坑群(1)	37
第25図	土坑群(2)	38
第26図	方形溝状遺構平・断面図	39
第27図	埴輪棺平・断面図	40
第28図	1号埴輪棺構成埴輪実測図(1)	41
第29図	1号埴輪棺構成埴輪実測図(2)	42
第30図	2号埴輪棺構成埴輪実測図	43
第31図	埴輪配列復元図	46
第32図	突帯数別にみた埴輪出土古墳分布図	48
第33図	2条突帯埴輪法量対比図	50
第34図	塚廻り古墳群円筒埴輪法量図	50
第35図	2条突帯埴輪変遷案図	51
第36図	2条突帯埴輪における底径と基部の高さ	53
第37図	各古墳出土土器集成図	55

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	7
-----	---------	---

第2表	円筒埴輪観察表	28
第3表	1号埴輪棺埴輪観察表	44
第4表	2号埴輪棺埴輪観察表	44
第5表	突帯数別にみた埴輪出土古墳一覧表	48
第6表	下桑島西原古墳群古墳一覧表	54

図版目次

PL 1	1 調査風景 (西から)	PL 12	1 南原古墳遺物出土状況 (南から)
	2 1号墳確認状況 (西から)		2 南原古墳周溝内土坑埋土状況
	3 1号墳全体セクション (東から)		3 南原古墳調査風景
	4 1号墳セクション (東から)		4 方形溝状遺構 (東から)
	5 1号墳セクション (西から)		5 2号墳周溝内土坑 (東から)
PL 2	1 1号墳箱式石棺天井部 (西から)		6 2号墳周溝内土坑 (南から)
	2 1号墳箱式石棺内 (北から)	PL 13	1 1号土坑埋土状況 (南から)
PL 3	1 1号墳木棺墓直上土器出土状況		2 2号土坑完掘 (南東から)
	2 1号墳木棺墓埋土状況		3 3号土坑埋土状況 (北から)
PL 4	1 1号墳木棺墓内直刀出土状況		4 4号土坑完掘 (東から)
	2 1号墳木棺墓内直刀出土状況		5 5号土坑埋土状況 (南から)
PL 5	1 1号墳木棺墓完掘状況		6 6号土坑埋土状況 (南から)
	2 1号墳完掘状況	PL 14	1 6号土坑完掘 (東から)
PL 6	1 2号墳埋土状況 (南から)		2 7号土坑埋土状況 (南から)
	2 2号墳遺物出土状況 (南から)		3 視察風景
PL 7	1 2号墳完掘状況 (南から)	PL 15	1 1号墳出土土器
	2 2号墳遺物出土状況 (南東から)		2 2号墳出土土器
PL 8	1 2号墳遺物出土状況 (南西から)		3 1号墳木棺墓出土直刀
	2 2号墳形象埴輪出土状況	PL 16	1 2号墳出土埴輪
PL 9	1 馬形埴輪出土状況 (南から)	PL 17	1 2号墳出土埴輪
	2 1号埴輪棺出土状況 (南から)	PL 18	1 2号墳出土馬形埴輪
PL 10	1 1号埴輪棺出土状況 (東から)		2 2号墳出土人物埴輪
	2 2号埴輪棺出土状況		3 2号墳出土形象埴輪破片
PL 11	1 南原古墳全景 (西から)		4 南原古墳出土遺物
	2 南原古墳埋土状況 (西から)	PL 19	1 1号埴輪棺
		PL 20	1 2号埴輪棺

I 調査の経過と方法

1 調査の経過

平成元年3月、宇都宮国際貨物ターミナルの開発計画が提出される。開発予定地の用地取得に携わっている株式会社十三から、予定地内の遺跡の状況に関する照会が本市社会教育課にあり、円墳（市登録遺跡270）と集落跡（市登録遺跡392）が開発地内にかかることを回答する。

同年3月29日、本市社会教育課、株式会社十三及び施工主である久和倉庫株式会社の3者により現地調査の結果、円墳（市登録遺跡270）は今回の開発予定地からは外れるので一応保存をし、集落跡（市登録遺跡392）は開発予定地内に入ることから取り扱いを検討するということで、結論を次回に繰り越す。

同年4月10日、円墳（市登録遺跡270）は保存するが、集落跡（市登録遺跡392）に関しては確認調査を実施後再度検討するということがまとまる。

同年9月16日～20日にかけて確認調査を実施した結果、円墳2基及び溝、土坑を数基確認。

この結果を基に9月25日に本調査について協議した結果、遺跡の現状保存を含めた開発計画の変更は不可能であるということとなり、記録保存のための発掘調査をすることで合意に至る。また、発掘調査に必要な費用面に関しては開発側である久和倉庫株式会社が負担し、調査は宇都宮市教育委員会が実施することとなった。

調査は、9月26日～11月6日までの約1か月間行なった。便宜上、これを第1次調査とする。

平成3年3月、好景気により需要が伸び宇都宮国際貨物ターミナル内倉庫が手狭となったため、新たな倉庫建設の計画が持ち上がり、前回保存を決定した円墳（市登録遺跡270）の周溝部分が一部建設予定区域に入ることから、本市文化課（旧社会教育課）と久和倉庫株式会社とが協議した結果、墳丘部分についての保存は合意を得たものの、周溝部分が一部かかるという計画を変更することは不可能のことから、記録保存の発掘調査をすることとなる。調査体制及び費用に関しては前回同様として、調査を実施した。

調査は、4月15日～5月18日の約1か月間行なった。便宜上、これを第2次調査とする。

2 調査の方法

第1次調査においては、まず遺構の有無を確認するために、東西方向に長いトレンチを10mおきに設定した。この確認調査の結果、溝状の遺構及び土坑数基が確認されたため、重機を使って表土を削ぎ、面的な広がりを見た。これにより、円墳2基、埴輪棺2基、土坑10基、方形溝状遺構1基があることが確認できた（第1図参照）。

円墳に関しては、すでに墳丘部分が耕作により削平されていたことから、周溝部分にセクションペルトを設定し、周溝内を全掘した。この結果、周溝内における埋葬施設等を確認することが

できた。

第2次調査は、墳丘部が一部残存しており、その形状から円墳と推察された。また、第1次調査と同様に古墳の周辺から土坑が確認される可能性もあるため、トレンチ調査により遺構の広がり具合を確認した。その結果、古墳以外の遺構は確認されなかったため、古墳の周辺のみ面的に広げた。また、調査の結果、古墳は円墳ではなく前方部が削平された前方後円墳であることが確認できた。

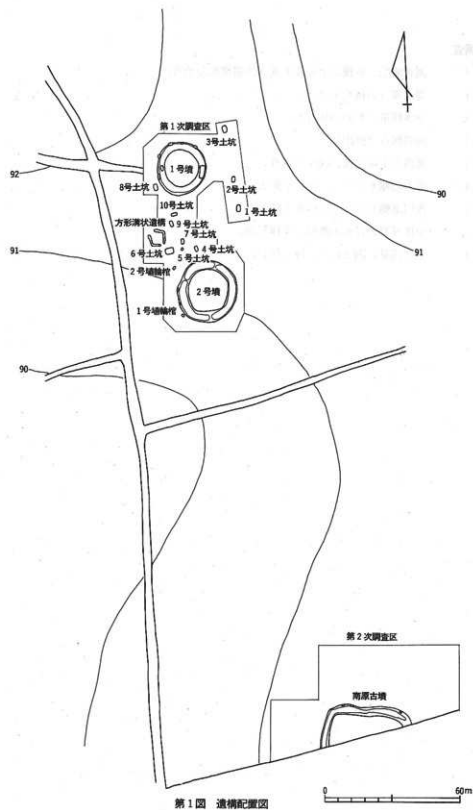
(発掘日誌抄)

第1次調査

- 9月26・27日 1号～3号土坑、掘り下げ、図面・写真。
- 10月2～6日 重機による表土剥ぎ後遺構部分精査、2号墳より埴輪片確認。
- 9日 方形溝状遺構掘り下げ、図面・写真。
4号～6号土坑掘り下げ、図面・写真。
- 12日 1号墳掘り下げ。
- 13日 周溝外壁に土坑が等間隔に並ぶことを確認。
周溝底から箱式石棺確認。
- 16日 周溝底より長方形の大型土坑(4号土坑)を確認。土坑確認面上より土師器環及び須恵器壺が出土。
- 18日 1号墳掘り下げほぼ完了、2号墳の掘り下げに移る。
- 20日 1号墳写真撮影のため清掃。
- 21日 1号墳全景写真及びセクション写真を撮る。2号墳掘り下げにより多数の埴輪片出土。
- 23日 方形溝状遺構の図面作成。
- 25日 1号墳4号土坑の掘り下げ及び1号墳箱式石棺の天井石を外す。
- 26日 箱式石棺の実測・写真
- 30日 2号墳セクション図作成。
- 11月1日 1号墳4号土坑遺物出土状態写真及び全体写真。2号墳セクション写真。
- 3～5日 2号墳図面・写真
- 6日 調査終了、後片付け。

第2次調査

- 4月15日 調査開始。重機による表土剥ぎ後遺構部分精査。
- 16日 周溝部分の掘り下げ。
- 22日 全体測量のための杭打ち。
- 24日 周溝底及び壁出し。
- 5月1日 周溝内土坑完掘、図面・写真
- 2日 前方部側セクションベルト除去。
- 7日 後円部側セクションベルト除去。
- 9日 全体写真のための清掃、全体写真。
- 10日 全体測量。調査終了、後片付け。



第1図 遺構配置図

II 遺跡の環境

1 地理的環境

本遺跡は、宇都宮市下桑島町1,200-3他に所在する。宇都宮駅の南南東方約6.5kmに位置し、近接して国道新四号線が南北方向に走り、これに隣接して瑞穂野工業団地、さるやま団地など工場及び住宅が立ち並び、

主な河川は、本遺跡から東方約3kmに鬼怒川が、西方約2.5kmに田川が南流する。この両河川に挟まれた台地には田原台地と岡本台地とがあり、本遺跡は岡本台地上、標高91mに立地する。台地上には小河川が流れ、本遺跡から西方約300mのところには田川から分流する武名瀬川が南流する。川の両側には水田が広がり、この水田面と遺跡との比高は約2mである。

本遺跡地内の調査前は、畑地及び陸田として利用されていた。

2 歴史的環境 (第2図参照)

本遺跡の周辺は、前述したように瑞穂野工業団地、さるやま団地が立ち並び、国道新四号線が走るなど急激に変貌を遂げつつある地域である。また、近年においては瑞穂野工業団地南側で国道新四号線と接続する宇都宮外環状線の建設が始まっている。このような多くの開発に先立ち、数多くの遺跡の調査が行なわれている地域でもある。

そこで、調査年度別ごとに遺跡の概要を記述しておく。

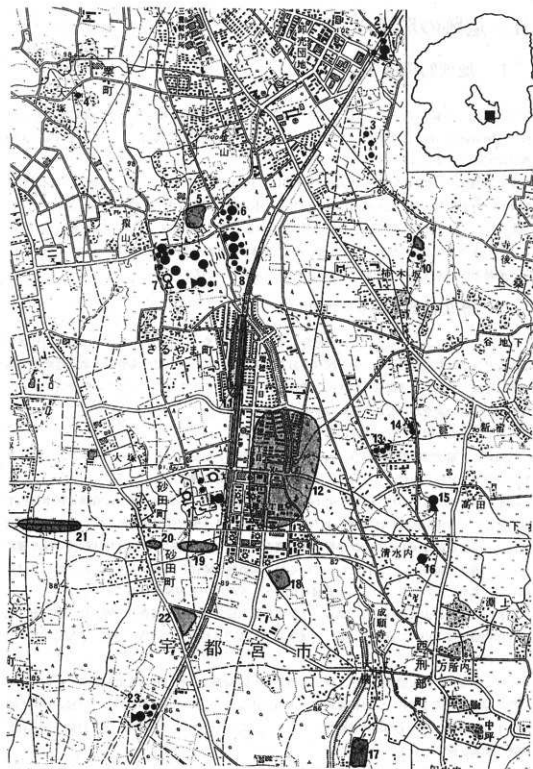
昭和48年に瑞穂野団地遺跡(12)の調査^{註②}。旧石器～奈良・平安時代にかけての集落跡。北地区発掘区と南地区発掘区を合わせて竪穴住居跡35軒、井戸跡等が確認された。

昭和49・50・53年の3次にわたり猿山A遺跡・猿山遺跡(11)の調査。猿山A遺跡は栃木県住宅供給公社による住宅造成に伴う調査で、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡7軒、井戸跡3基が確認された。猿山遺跡は国道新四号線建設に伴う調査で、竪穴住居跡61軒、掘立柱建物跡8棟が確認された。調査・報告が別々に行なわれているが、両遺跡は隣接し1遺跡と考えられ、現在では猿山遺跡の名称に統合されている。本遺跡は奈良・平安時代の大型集落跡である。

昭和63年度に砂田A遺跡(21)の調査^{註③}。宇都宮外環状線建設に伴う調査で、竪穴住居跡34軒、掘立柱建物跡6棟、円形周溝遺構3基、土坑56基等が確認された。古墳時代後期～平安時代にかけての集落跡である。

平成2年度に砂田東遺跡(20)・上横田A遺跡(19)の調査^{註④}。これも砂田A遺跡の延長上の宇都宮外環状線建設に伴う調査で、砂田東遺跡は古墳時代前期～後期にかけての竪穴住居跡が18軒の他溝や土坑が確認され、上横田A遺跡では奈良・平安時代を中心とした竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟等が確認された。

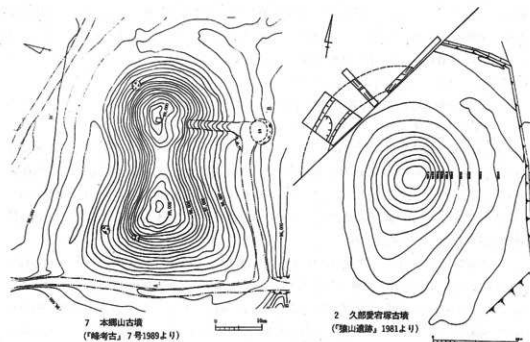
以上のとおり、本古墳群を取り巻く集落遺跡に関しては、記録保存による調査の増加の結果、



第2回 周辺道路分布図 (1:50,000)

No	遺跡名	種別	時期	備考	No	遺跡名	種別	時期	備考
1	下島島原古墳群	古墳	古墳	前方後円墳1,円墳2	13	島島古墳群	古墳群	古墳	円墳3
2	久那安岩塚古墳群	古墳群	古墳	前方後円墳1,円墳2	14	脱木西台古墳群	古墳群	古墳	円墳2
3	石井久保田古墳群	古墳群	古墳	円墳3	15	飯塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳(33m)
4	大塚塚古墳	古墳	古墳	円墳1	16	飯塚山古墳	古墳	古墳	円墳(21m)
5	大久保台遺跡	集落跡	古墳～平安		17	平塚新飯塚遺跡	集落跡	古墳～平安	
6	天王山古墳群	古墳群	古墳	円墳3	18	大岡台遺跡	集落跡	奈良・平安	
7	さるやま古墳群	古墳群	古墳	前方後円墳1,円墳13	19	上渡山人遺跡	集落跡	奈良・平安	住居跡11,竪立1等
8	東原古墳群	古墳群	古墳	前方後円墳2,円墳4	20	砂田東遺跡	集落跡	古墳	住居跡18,土坑
9	柿木板遺跡	集落跡	縄文		21	砂田遺跡	集落跡	古墳～平安	
10	柿木板古墳群	古墳群	古墳	円墳2	22	西明塚高塚遺跡	集落跡	古墳～平安	
11	瑞穂山遺跡	集落跡	奈良・平安	住居跡85,竪立10等	23	等平塚古墳群	古墳群	古墳	前方後円墳1,円墳3
12	瑞穂野団地遺跡	集落跡	古墳～平安	住居跡35,井戸等					

第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 周辺前方後円墳実測図

データが揃いつつある。

このような発掘調査以外にも分布調査などで、周辺にはたくさんの遺跡があることが確認されている。以下、時代毎に周辺遺跡を概観してみる。

旧石器時代の遺物は前述した瑞穂野団地遺跡から1点剥片が出土している。本時代に関しては本市の調査例自体が少なく、今後の調査例の増加が待たれる。

縄文時代の遺跡は柿木板遺跡(9)、瑞穂野団地遺跡(12)が挙げられる。柿木板遺跡は鬼怒川右岸の段丘東端部に立地し、畑の中に縄文時代中期の土器片が散乱している。瑞穂野団地遺跡も表探資料によると縄文時代早期の所産である。

弥生時代後期の遺跡は瑞穂野団地遺跡(12)が挙げられる。南地区発掘区において2軒の竪穴住

居跡が確認された。本県において弥生時代の住居跡の調査例は少なく、貴重な資料である。

古墳時代後期に入り遺跡の数が急増する。

まず、古墳についてみる。本古墳群を混せて、岡本台地上には点々と古墳群が造られていく。現時点では飯塚古墳(15)や飯塚山古墳(16)のように単独で存在するものも、耕作などにより削平を受け、本来は古墳群を形成していたものと考えられる。そのよい例が今回調査した西原古墳群である。これらの古墳群の立地状況を見ると、大きく2つに分けられる。1つは鬼懸川低地を望む岡本台地東端部に立地するグループと、武名瀬川の流れる水田面を望む岡本台地西端部に立地するグループである。前者のグループには久部愛宕塚古墳群(2)、石井久保田古墳群(3)、柿木坂古墳群(10)、桑島台古墳群(13)、根本西台古墳群(14)、飯塚古墳(15)、飯塚山古墳(16)がある。後者のグループにはさるやま古墳群(7)、西原古墳群(1)、琴平塚古墳群(23)があり、天王山古墳群(6)、東原古墳群(8)も、さるやま古墳群の支群と考えれば後者のグループと考えられよう。さらに言えば、後者においては約1.5kmの間隔をおいて古墳群が立地している。このことは、おのおの持つ生産基盤との関連性からくものとも考えられる。

因みに、この地域において前期、中期の古墳は今のところ確認されておらず、すべて6～7世紀にかけての古墳と考えられ、突然爆発的に古墳が造られた様子が窺い知れる。

これに対し集落跡についてみる。第1図中で示した中では、大久保台遺跡(5)、瑞穂野田地遺跡(12)、平塚原根岸遺跡(17)、砂田東遺跡(20)、砂田遺跡(21)、西刑部西原遺跡(22)の5遺跡が挙げられる。今のところ1古墳群に対して、1集落跡という対応関係がすべての古墳群でみられるわけではなく、今後の調査例の増加により検討する必要がある。本古墳群の周辺には、比較的古墳時代後期の集落跡が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、大久保台遺跡(5)、猿山遺跡(11)、瑞穂野田地遺跡(12)、平塚原根岸遺跡(17)、大関台遺跡(18)、上横田A遺跡(19)、砂田遺跡(21)、西刑部西原遺跡(22)が挙げられる。これらのうち猿山遺跡、瑞穂野田地遺跡に関しては前述したように多数の住居跡及び竈立柱建物跡が確認されており、この周辺が河内郡刑部郡であった可能性も指摘されている。刑部郡かどうかの正否はいずれにせよ、本古墳群の周辺に、後続する時代には大規模な集落が営まれたことに間違いはない。

註

- ①吉村光右「第二節 宇都宮の地形と地質」『宇都宮市史』第1巻原始古代
- ②宇都宮市教育委員会「瑞穂野田地遺跡」1978
- ③栃木県教育委員会「猿山A遺跡」1978
- ④川原由典・中山晋「猿山遺跡」栃木県教育委員会 1981
- ⑤芹沢清八「砂田A遺跡」『宇都宮市文化財年報』第5号 1989
- ⑥中山晋「砂田東遺跡・上横田A遺跡」『宇都宮市文化財年報』第7号 1991

III 遺構と遺物

1-1号墳

本墳は調査区の最も北よりに位置し、標高91.5m前後のほぼ平坦な面に立地する。また2号墳から北へ約30m、西方の谷部からは約150mの距離を測る。墳丘は水田耕作により全て削平され、確認できたものは周溝部分のみであった。

本墳周辺の基準土層は、表層から①褐色土（水田耕作土）②赤褐色土（水田の床土）③褐色土④黄褐色土（ローム漸移層）そしてローム層となっており、①②層を取り除いた③層中で遺構の確認が可能であった。ただし、調査では遺構の確認がより明確となる④層まで掘り下げることとした。

(1) 墳形と規模

墳形は、南北方向に心持ち長い円墳である。直径は周溝内側の立ち上がりで測った場合、南北方向が16.7m、東西方向が16.5mである。また、周溝を含めた直径は、確認面における計測で南北方向が23.4m、東西方向が22.2mである。なお、周溝の外郭線は表土から残っている土層断面（第5図-A）の所見や周溝外側に取り付けられたとみられる土坑の状況などから少なくとも1m前後は外に延びていたものと考えられる。

確認面における周溝の幅は、東と西がやや狭く2.5m～3.0m、北と南がやや広く4m前後となっている。深さは南側が全体に深めで、確認面より60cm前後を測る。これに対し北側は全体に浅めであり、とくに周溝幅の狭くなる東と西の部分では30cm程度となっている。また周溝の立ち上がりは、内側（墳丘側）に対して外側がかなり緩やかとなっている。

墳丘は前述したとおり全て削平されており、盛土は全く確認されていない。また、この墳丘内においては全く遺構を確認することができず、少なくとも確認面であるローム漸移層まで掘りこむような埋葬施設はなかったものと判断できる。

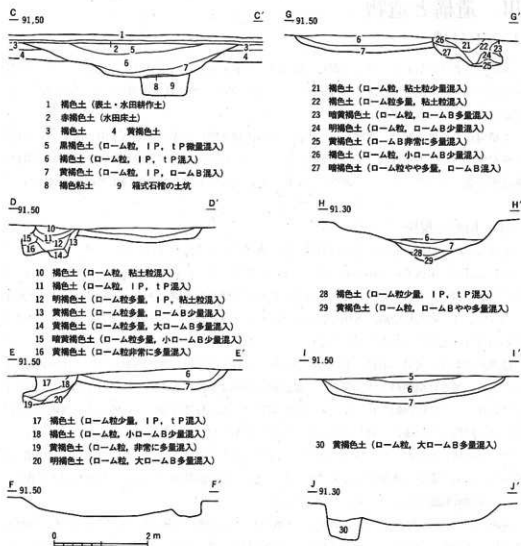
周溝内からは、後述する埋葬施設の他に多数のピットが確認されている。これらは径20cm前後、深さ15～30cm程の小穴がほとんどであり、ほぼ周溝内全体にみられるが、全体的には規則性が見いだし難いものである。

(2) 周溝内埋葬施設

本墳の周溝内からは、比較的多くの埋葬施設が確認されている。確認された埋葬施設の内容は、大型の墓壇を伴った木棺墓が1基、小型の箱式石棺が一基及び長方形の土坑5基である。また、これらの埋葬施設の周溝内における配置が特徴的であり、まず木棺墓と箱式石棺が東西に対置するようあり、5つの土坑は北から西の周溝外側に適当な間隔をおいて配されている。なお、南側の周溝内には、このような埋葬施設を確認することができなかった。

木棺墓（第6図）

東側周溝内のほぼ中央に配された埋葬施設であり、周溝底をいっぱいに使って大きな長方形の

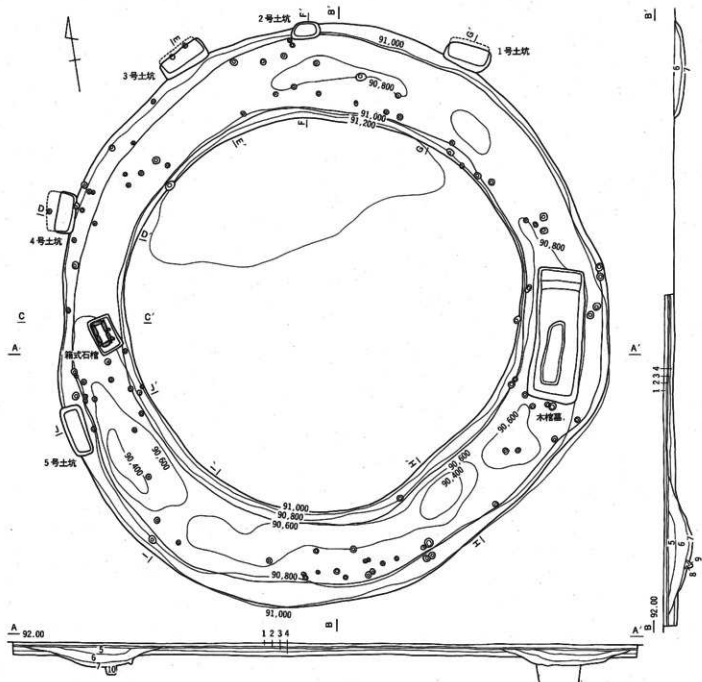


第4図 1号墳周溝・土坑断面図

墓壇が掘られ、その底部に木棺が据えられたものである。本墳で確認された周溝内の埋葬施設の中では、最も規模の大きいものである。

墓壇の大きさは長軸5.3m, 短軸1.85m, 周溝底からの深さ1.25mである。平面形は長方形であるが、周溝にそって長軸方向の壁が僅かに湾曲しているのが特徴的である。また、北壁側には、周溝底からの深さ約20cmのところ幅40cm程の段が設けられている。なお、墓壇の底面は鹿沼軽石層の上面まで達している。この層は非常に水捌けのよい層であることから、墓壇内の排水を意識したものと考えられる。

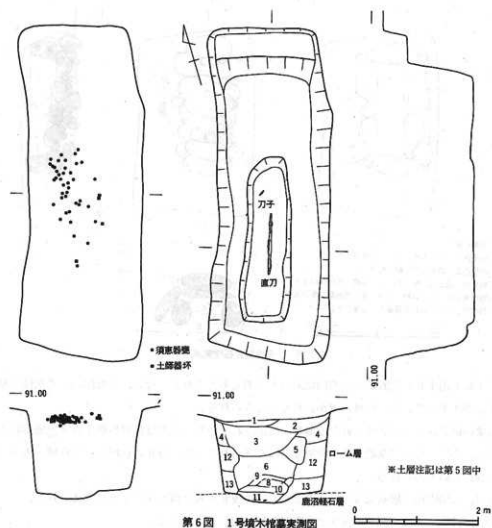
木棺については、調査の中で十分な平面観察を行ったため正確な形状と大きさを記録すること



- | | | |
|------------------|------------------------------|-----------------------------|
| 1 褐色土 (黄土・水田耕作土) | 5 黒褐色土 (ローム粒, I P, I P 微量混入) | 9 明褐色土 (ローム粒やや多量, I P 少量混入) |
| 2 赤褐色土 (水田耕土) | 6 褐色土 (ローム粒, I P, I P 混入) | 10 箱式石塚の土坑 |
| 3 褐色土 | 7 黄褐色土 (ローム粒, ロームB, I P 混入) | 11 木塚墓の土坑 |
| 4 黄褐色土 | 8 褐色土 (ローム粒多量, I P 混入) | |

第5図 1号墳平・断面図

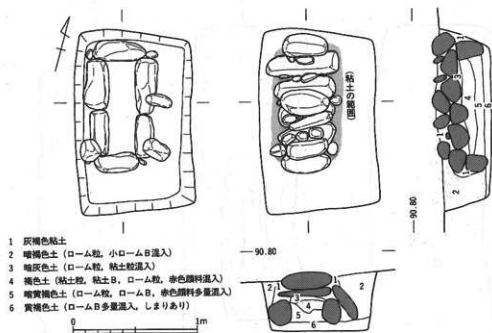
- 木塚墓の土塚
- | |
|-------------------------------|
| 1 黒色土 (ローム粒混入土層片) |
| 2 黒褐色土 (ローム粒, 小ロームB混入) |
| 3 褐色土 (ロームB, 塵滓B混入) |
| 4 褐色土 (ローム粒多量, ロームB少量混入) |
| 5 黄褐色土 (ロームB多量混入) |
| 6 褐色土 (ロームB多量, 塵滓B少量混入) |
| 7 黒色土 (ローム粒, 小ロームB少量混入, サラサラ) |
| 8 黄褐色土 (ロームB多量混入) |
| 9 褐色土 (ロームB少量, 塵滓B混入) |
| 10 暗褐色土 (ローム粒, 小ロームB混入, バサバサ) |
| 11 // (ローム粒, 小ロームB混入, 粘性有り) |
| 12 黄褐色土 (ロームB, 塵滓B混入) |
| 13 // (ロームB, 塵滓B多量混入, しまり有り) |



第6図 1号墳木棺墓実測図

ができなかった。しかし幸いにも墓壇の底面より木棺を据えたとみられる浅い掘り込みが確認され、これによりある程度推定できる。確認された掘り込みは幅70~80cm、長さ2.65m、深さ15cm前後で、底面には丸みがみられた。また、掘り込みの位置が墓壇の南側に寄っているのが気掛かりであるが、後述する副葬品の出土位置からみると納まり方はよいようである。以上のことから、木棺は確認された掘り込みとほぼ同じような大きさで、形態は割竹形か舟形、そして墓壇の南寄りに据えられているものと推測される。

副葬品は直刀1振と刀子1振である。直刀は木棺部のほぼ中央で、掘り込みの底面より僅かに浮いた状態で検出された。切っ先を南にし、刃部は東に向けられていた。刀子は木棺部の北西よりで、直刀より若干高い位置から検出された。切っ先は南東を向きやや下がった状態であった。



第7図 1号墳箱式石棺実測図

いずれも出土した位置から木棺内にあつたものと考えられる。なお、木棺部のすぐ西側より鉄鏝が1点出土している。棺外に置かれたものとみられる。

墓墳の確認面より、破砕された土器類が検出されている。土器は須恵器壺1点と土師器杯1点であり、小片となって墓墳上面の中央部にばらまかれていた。分布の状況から墳丘側の方から投げられたものとみられる。

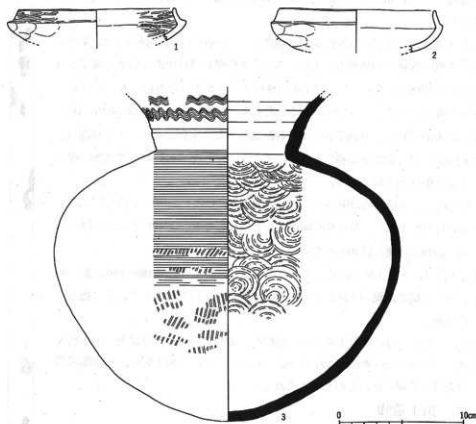
なお、墓墳内の土層断面などから埋葬の手順を復元すると概ね次のように考えられる。

- ① 周溝内に墓壇を掘る。深さは鹿沼軽石層が出るまでとする。
- ② 墓壇底面に木棺を据えるための浅い掘り込みを作る。
- ③ 木棺を据え、周囲をロームブロックに鹿沼軽石を混ぜた土で覆い固める。
- ④ 最後に残った土で墓壇を埋め、祭祀に使用した土器類を破砕して上面にばらまく。

箱式石棺 (第7図)

西側周溝内に配された埋葬施設である。川原石を使用した小型の箱式石棺であり、主軸は周溝の向きと異なりやや西に傾いた (N-11°-W) ものである。

掘形は石棺の規模に比べやや大きめである。南北1.45m、東西95cm、深さ45cmの長方形で、木棺墓の墓壇掘形と同様に長辺が心持ち湾曲する形となっている。石棺はこの掘形の中央部になく、北西コーナーに寄せた形で構築されている。長さ35~45cmの細長い川原石を6個使用して長方形の箱型に組んだものであり、内法は長軸73cm、短軸21cm、高さ15~18cmである。



第8図 1号墳出土土器実測図

掘形の床面はロームブロックを多量に含んだ土で厚さ7~8cmに張床されている。石棺はこの張床に埋め込むような形で組まれており、特に床石のようなものは使用されていない。蓋石はまず長さ40~50cmの大きな川原石5個が覆され、さらに隙間を埋めるように小さめな川原石と玉石がのせられたものであり、全体は粘土で目張りがなされていた。また掘形の他の部分は小ロームブロックを多く含んだ土で埋められていた。

なお、副葬品等の遺物は全くみられなかったが、石棺内部全体から赤色顔料が、検出されている。

土 坑

周溝の北から西にかけては、外縁に沿って5つの土坑が確認されている。いずれも長方形の土坑で、互いに適当な間隔をおいて配置されている。副葬品等の出土遺物は確認されなかったが、いずれも埋葬施設と考えられる。

1号土坑は、最も東寄りに位置する。長軸1.9m、短軸0.9m、深さ48cmの長方形土坑で外側壁がえぐられ断面が「L」字形となる。確認段階におけるこのえぐれは10cm程であったが、埋土の

状況からみると肩部がかなり崩れており本来は30cmくらいのえぐれであったものとみられる。

2号土坑は、1号土坑の西約6mに位置する。長軸1.15m、短軸0.7m、深さ35cmのやや楕円気味の小型長方形土坑である。外側壁はほぼ垂直な状態で確認されているが後の崩れを考えると1号土坑同様のえぐれがあったものと考えられる。

3号土坑は、2号土坑の西約5mに位置する。長軸2.05m、短軸0.85m、深さ60cmの長方形土坑で、外側壁がえぐられ断面が「L」字形となる。えぐれ部は、高さ約30cm、奥行約30cmの横穴となる。また、えぐれ部の底面には深さ20cm程のピットが2個検出されている。

4号土坑は、3号土坑の南西約7mに位置する。長軸1.65m、短軸0.75m、深さ65cmの長方形土坑で、やはり断面が「L」字形となる。えぐれ部はやや段につき、高さ約40cm、奥行約40cmの横穴となる。

5号土坑は、4号土坑の南約8mに位置する。長軸2.1m、短軸0.9m、深さ50cmの長方形土坑で、他の土坑のように断面が「L」字形とはならず、直に掘られたものである。

なお、1号、3号、4号土坑での土層観察により、いずれも周溝埋土の下層を掘り込んでいることが確かめられている。おそらくこれらの土坑は、主体部埋葬後、順を追って掘られたものと考えられる。

(3) 出土遺物

土器 (第8図)

本墳から出土した土器は、須恵器壺1点と土師器環2点である。

1は木棺墓上から出土した土師器環片で、口縁部1/4程度の破片である。残存高2.5cm、推定口径12.6cm。体部外面に稜を有して口縁部が内傾する。体部外面はヘラケズリ、内面および口縁部外面は横位のヘラマガキで仕上げられ、内面は黒色処理されている。胎土は緻密で、焼成も良好。

2は、南東周溝部の埋土下層から出土した土師器環片で、口縁部1/3程度の破片である。残存3.4cm、推定口径12.6cm。器形は1と同様であるが、稜の張り出しがやや弱い。体部外面はヘラケズリ、内面および口縁部外面はヨコナデで仕上げられている。胎土はやや砂質で、明褐色を呈する。

3は木棺墓上から出土した須恵器壺で、口縁部を欠損する。残存高26.5cm、胴部最大径28.0cm、頸部径11.5cm。底部は丸底で、肩部に稜をもち、口縁部は大きく外反する。口縁部外面には、2段の波状文と1条の沈線が施される。胴部外面は平行タタキの後、上半カキ目で仕上げ、内面には同心円文を残す。胎土には白色粒子を含み、焼成は良好で暗灰色を呈する。



第9図 1号墳木棺墓出土土直刀

鉄器 (第9図)

本墳から出土した鉄器は、木棺墓出土の直刀1振と刀子1振および鉄鎌1本である。但し、刀子と鉄鎌については調査終了後に紛失してしまい、ここに掲載することができない。深くお詫げを申し上げる次第である。

直刀は全体に錆化が著しいものの、ほぼ原形を保っている。平棟平造りで、刃長80.4cm、身幅2.8~3.6cm。茎はやや細身で、長さ16.7cm。2個の目釘穴がある。鋒はふくら。刃は片刃で、斜めに切り込まれている。なお、部分的にはあるが、木質が残る。

2 2号墳

本墳は1号墳の南約30mのところを位置し、標高は90.5m前後で、第1図の遺構配置図でも示したように東西方向に入りこむ谷の落ち際に立地する。確認調査において、この南側からは遺構が確認できなかった。墳丘は1号墳同様水田耕作により全て削平され、確認できたのは周溝部分のみであった。

(1) 墳形と規模 (第11図)

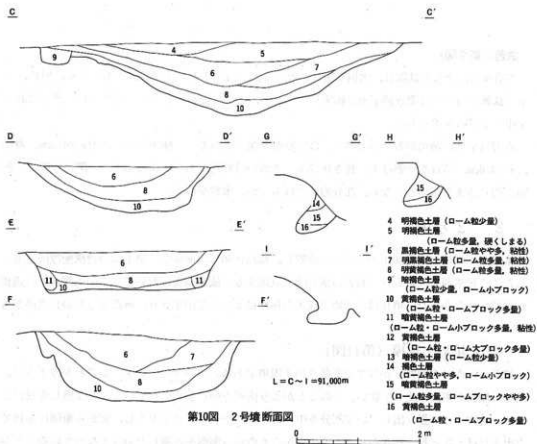
墳形は、西から南側にかけてやや張り出す円墳である。第11図のコンターからわかるように、西側の傾斜が東側に比べて緩い。このことがより南西方向に張り出しているような感じを受けさせる。遺物もこの張り出している部分を中心に西から南側にかけて出土し、北から東側にかけての出土はほとんど見られなかった。この点からも西から南側を意識した造りとなっていることが窺える。ただし、基本的には円墳の形であり、直径は周溝の内側の立ち上がりで測った場合、東西南北方向、南北方向ともに20.5mである。また、周溝を含めた直径は、確認面における計測値で南北方向が26.5m、東西方向が27.5mである。

確認面における周溝の幅は、南西側が6mと一番広がり、北から東側にかけては2.9~3.6mの間の幅で掘られている。深さも南西側が深く、確認面からの深さが1.2mなのに対し、北から東側にかけてはやや浅く0.8~1.0mの深さである。周溝内の埋土状況は、北側の浅い部分に関しては、10層→8層→6層の順で堆積し、南側の深い部分に関しては、8層→6層の間に7層が入り、さらに6層の上に4層、5層が堆積する。

墳丘は、全て削平されており、また墳丘内における遺構も確認できなかった。このことから、1号墳同様、ローム漸移層まで掘り込むような埋葬施設は無かったものと考えられる。

周溝内からは、1号墳ほどではないが、長軸約1m前後の土坑が3基確認できた。この3基も西側から南側に位置する。また、小穴も数は少ないが、周溝内全体に見られる。小穴の一部は墳丘内にも見られ、その位置から判断して、埴輪の樹立に関係がある可能性が考えられる。

また、南西側において、古墳に隣接して埴輪棺が確認できたが、第10図の断面図からもわかるように、周溝内に10層(黄褐色土層)が堆積した後に掘り込まれていることから、古墳築造後に一定の期間が過ぎた後、古墳の周溝を意識して埴輪棺が埋葬されたと考えられる。



(2) 周溝内埋葬施設

本墳も1号墳同様、周溝内での埋葬施設が確認されている。ただし、1号墳に比べ数が土坑3基と少なく、大きさも3基とも長軸1m前後と小型である。

土坑

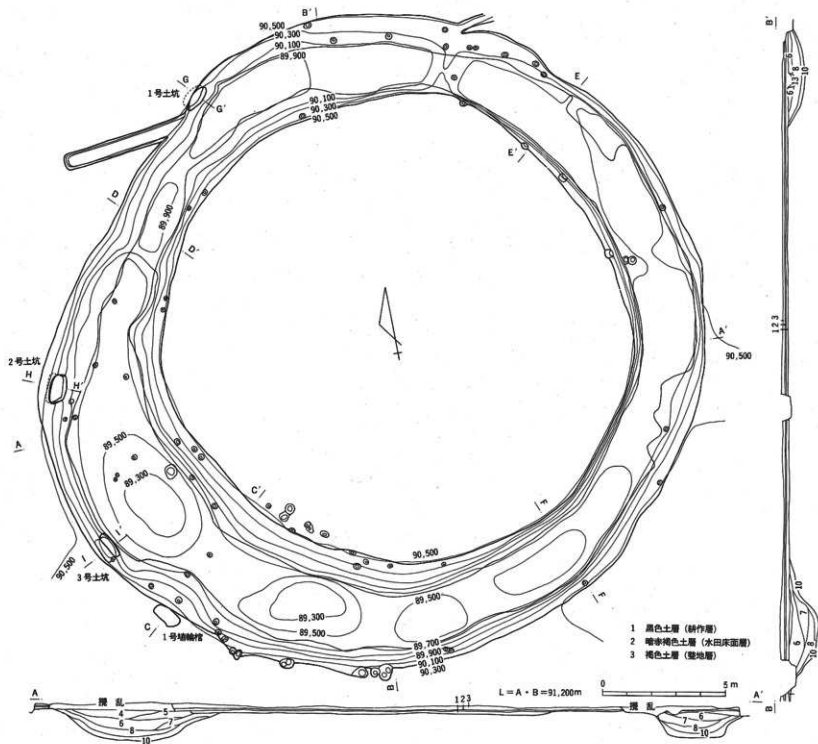
周溝の北から西にかけて、周溝外側壁をえぐる断面「L」字形の土坑が3基掘られている。

1号土坑は、一番北側に位置する。長軸1.15m、短軸0.45m、深さ60cmの長方形土坑で、周溝外側壁をえぐり込んでいる。他の土坑と多少違う感じを受けるが、やはり一旦縦に掘ってから横に掘るという意識で掘られている。

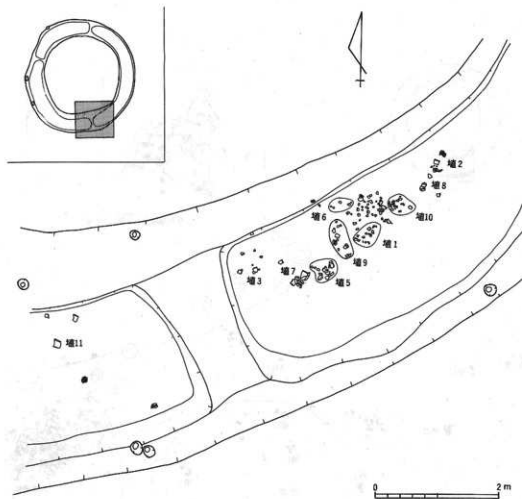
2号土坑は、1号土坑から南西に約12mのところに位置する。長軸1.2m、短軸0.70m、深さ50cmの長方形土坑で、外側壁がえぐられ断面「L」字形となる。

3号土坑は、2号土坑から南に約6mのところに位置する。長軸1.0m、短軸0.30m、深さ35cmの長方形土坑で、他の土坑に比べて規模は一番小さいが、しっかりとした断面「L」字形となっている。

なお、1号、2号土坑の土層観察により、土坑埋土の15層と周溝内埋土の10層がともに暗黄褐色であり、ローム粒、ロームブロックを多量に含むことから、1号墳同様、主体部埋葬後、近い時期に、順を追って掘られたものと考えられる。



第11图 2号墳平・断面图



第12図 2号墳遺物出土状態図(1)

この他、前述したように周溝に接して埴輪棺が出土しているが、節を改めて記載する。

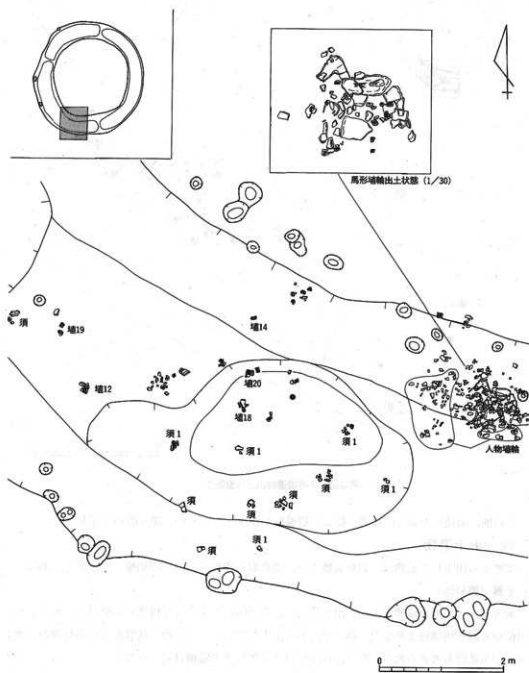
(3) 出土遺物

本墳から出土した遺物は、須恵器壺1点、須恵器長頸壺1点、円筒埴輪（人・馬）である。

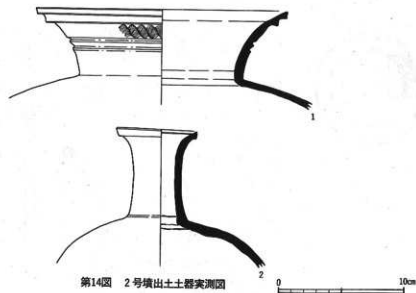
土器（第14図）

須恵器1は、須恵器壺である。出土状況は、第13図に示すとおり周溝外側壁付近にかたまり、層位が6層と周溝底よりかなり高い位置から出土している。この出土状態から周溝外側から流れ込んだ可能性も考えられる。但し、近辺には2号墳以外の遺構は見られない。

口縁部径25.8cm。胴部から底部にかけて欠損しているため全体的な形状がわからないが、胴部が張り、口縁部が外反する。口縁部外面には1段の波状文と2条の沈線が施される。胴部外面格子叩き目の後スリケン、内面スリケン調整がなされている。胎土には白色粒子を含み、焼成は良



第138圖 2号墳遺物出土狀態(2)



第14図 2号墳出土土器実測図

好で、灰白色を呈する。

須恵器2は、須恵器長頸壺である。出土地点は、第15図に示すとおり古墳北西部で、層位は6層と須恵器1と同様である。また、周りからは埴輪も多数出土している。

口縁部径8.2cm。胴部から底部にかけて欠損している。肩部は丸味を帯び、頸部が直立して立ち上がり、口縁部で強く外反する。口縁部内面に1条の沈線が廻る。内外面回転横ナデ。胎土には白色粒子を含み、焼成は良好で、外面灰白色、内面紫灰色を呈する。

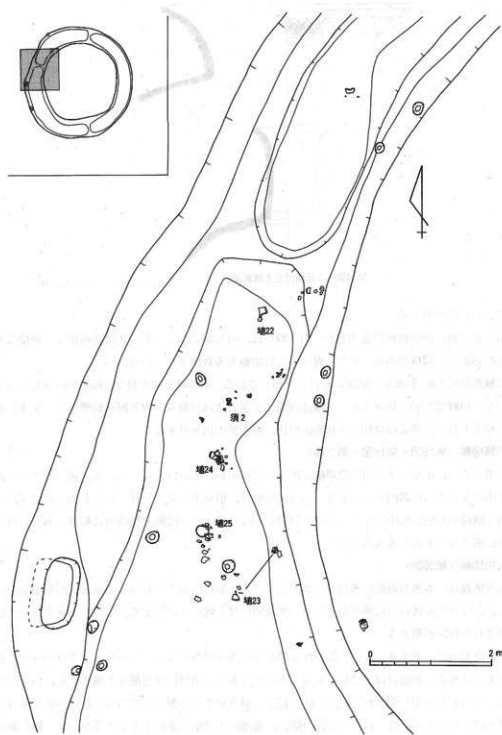
円筒埴輪 (第16図～第18図・第2表)

本墳からは、かなり多くの円筒埴輪が出土しているが、そのほとんどが、先に述べたように西から南にかけての周溝内からである。当然、埴輪は、墳丘上に立てられていたものであるが、その出土層位が6層に集中することから、周溝がかなり埋まった段階で周溝内に転落、あるいは人為的に崩されたものと考えられる。

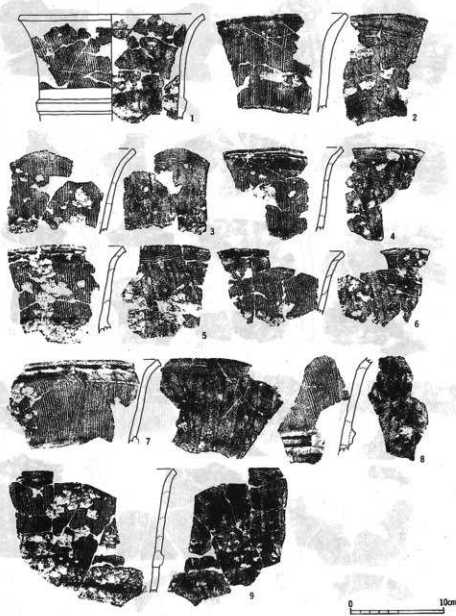
人物埴輪 (第20図)

人物埴輪は、本墳の南側周溝内から出土している。第13図からもわかるように、馬形埴輪と近接し、かなりばらばらの状態で出土した。層位的には7層からの出土で、転落というよりは一括投棄された状況が窺える。

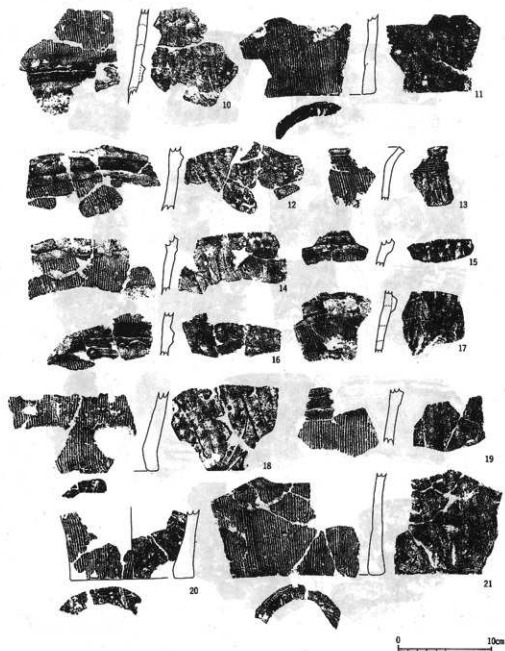
残存高34cmで、下半身になると思われる部品が1点も見当たらないことから、上半身のみの半身像と考えられる。顔面は扁平で長さ8cmと小振りである。頭部には突帯を1周させる。目と口は横長にしっかりと切り開かれている。鼻も長く、引き締まった顔立ちである。耳は小孔を開けて耳孔を示したのみである。耳孔と顔面の間に、頭部の突帯から垂れ下る粘土帯がある。胸は胴の真横で、左手を高く挙げ、右手を下に向けるという仕草をとる。また、胴部には乳房の表現が見



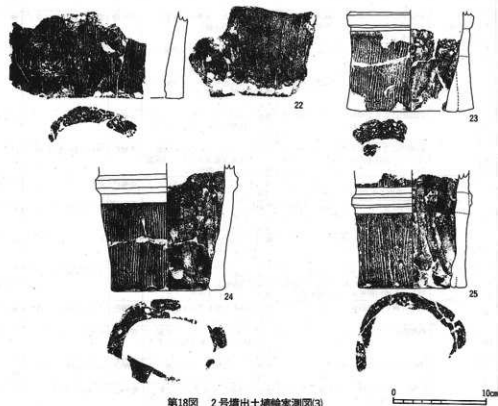
第15图 2号墩遺物出土狀態図③



第16图 2号墳出土埴輪実測図(1)



第17图 2号出土车轴铜轮(2)



第18図 2号墳出土埴輪実測図③

られる。外面はハケ調整を主として行ない、一部ナデ消されている。腕は中実の差し込み式である。色調はくすんだ赤褐色で、粒子が細かく、硬質の焼き上がりである。

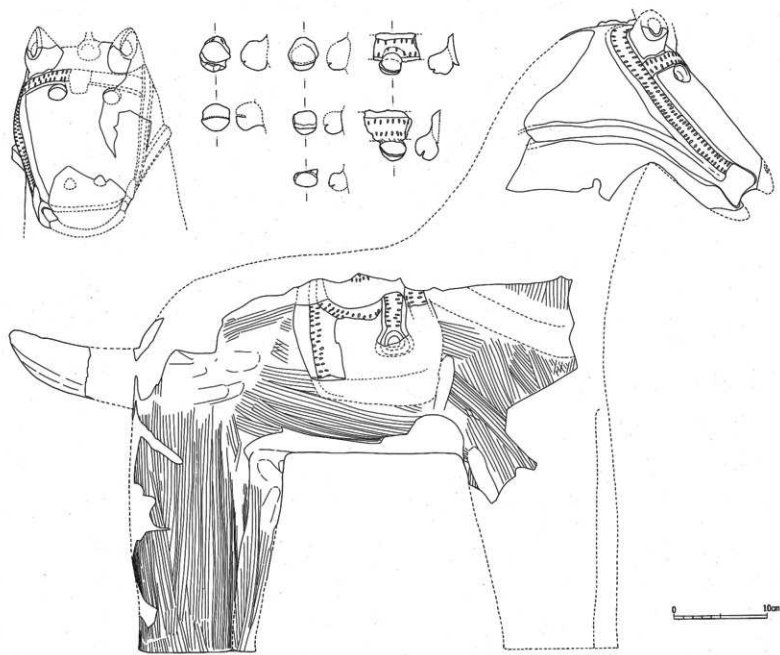
馬形埴輪 (第19図)

人物埴輪と近接して出土し、層位もほぼ同様の7層であるが、やや周溝底に近い位置から出土している。部品的には鞍や馬鈴など全体的に揃うが、軟質の焼きであるため接点が磨耗し接合しない部分が多々ある。

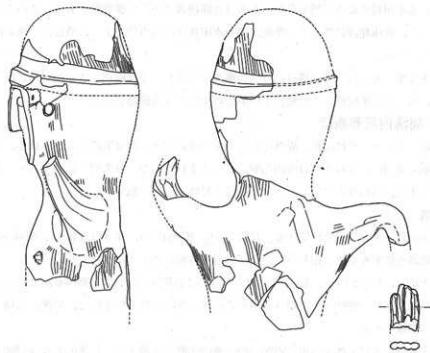
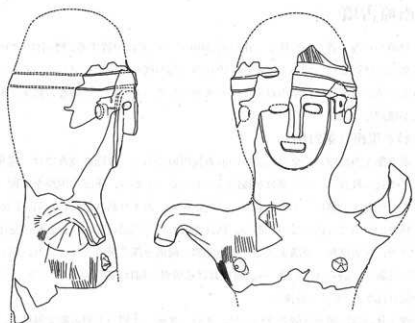
頭部は2/3ほど残存し、面繫と手綱が粘土帯の張りつけにより表現されている。面繫は2列の刺突により表現されている。鼻及び目は円形に切り取られている。頭部と胸部を繋ぐ頸部が欠損しているが、繫がり具合からすると図のように復元できる。頸部から前足にかけての部分に粘土帯を貼りつけた痕跡があり、飾金具が付いていた可能性がある。鞍及び輪轡は粘土帯の貼りつけにより表現され、面繫と同様に2列の刺突が施される。前輪或いは後輪と思われる部品もあるが接合しない。尻繫の表現は見られないが欠損部分にあった可能性も考えられる。全体的にはずんぐりとした感じを窺わせる。推定全長82cm、推定高67.3cm、耳前から先端まで約22cm、脚底径10cm、脚長21.4cmを測る。全体的にハケ仕上げで、色調は淡褐色、軟質の焼き上がりである。

No	寸法 (cm)	形 態 の 特 徴	製 作 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成
1	口径59.6	直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は面を持つ。突帯は扁平な台形を呈する。	外周1cmあたり5条の1次縦ハケ内面口縁部のみ横ハケで、以下ナシ。	赤褐色	雲母、赤色スコリア粒、砂粒	硬 質
2		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は丸くおさまる。	外周1cmあたり4条の1次縦ハケ内面指ナシ（横位→縦位）。外面に1.5cmのへらぎ呈す。	赤褐色	砂粒、小石	硬 質
3		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。	外周1cmあたり5条の1次縦ハケ内面口縁部のみ横ハケで、以下ナシ。	赤褐色	砂粒、小石	硬 質
4		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は面を持つ。	外周1.5cmあたり7条の1次縦ハケ。口縁部内外面ヨコナデ、以下ナシ。	赤褐色	砂粒	中や硬質
5		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は下方に突き出し面を持つ。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。口縁部内面ヨコナデ。口縁部内面ハケ。以下指ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
6		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は上方にやや突き出し面を持つ。	外周1cmあたり4条の1次縦ハケ口縁部内面ハケ。以下指ナシ。	赤褐色	砂粒	中や硬質
7		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は下方に突き出し面を持つ。	外周1.5cmあたり7条の1次縦ハケ。口縁部内面横ハケ後口唇部内面ヨコナデ。以下ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
8		突帯は扁平な台形を呈する。	外周1.5cmあたり7条の1次縦ハケ。口縁部内外面ヨコナデ。以下ナシ。	赤褐色	砂粒、小石	硬 質
9		ほぼ直線的に立ち上がり、口唇部に面を持つ。突帯は欠損。底縁は一部存在し、不整円形を呈するとと思われる。	外周1cmあたり5条の1次縦ハケ口縁部内面横ハケ後、口縁部内外面ヨコナデ。以下ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	中や硬質
10		突帯は扁平な台形を呈する。	外周2cmあたり6条の1次縦ハケ内面ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
11		直線的に立ち上がる底縁。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面指ナシ。底縁はゆるぎなく上げ。	淡褐色	砂粒、小石	中や軟質
12		突帯は扁平な台形を呈する。	外周1cmあたり4条の1次縦ハケ内面ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
13		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は面を持つ。	外周1cmあたり4条の1次縦ハケ。口縁部内面横ハケ後、口縁部内外面横ナシ。以下ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒	中や硬質
14		突帯は扁平な台形を呈する。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
15		突帯は扁平な台形を呈する。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
16		突帯は扁平な台形を呈する。	外周1cmあたり4条の1次縦ハケ内面ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
17		突帯は扁平な台形を呈する。	外周2cmあたり6条の1次縦ハケ内面ナシ。	淡褐色	砂粒、小石	中や軟質
18		直線的に立ち上がる底縁。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面指ナシ。	淡褐色	砂粒、小石	中や軟質
19		突帯下端がかなり扁平になり、前面三角形に近い形状を呈する。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面指ナシ。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	硬 質
20	底径17cm	直線的に立ち上がる底縁。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面指ナシ。	淡褐色	砂粒、小石	中や軟質
21		直線的に立ち上がる底縁。	外周1cmあたり、条の1次縦ハケ内面指ナシ。	淡褐色	雲母、砂粒、小石	中や軟質
22		直線的に立ち上がる底縁。	外周1次縦ハケ。内面指ナシ。	淡褐色	雲母、砂粒、小石	中や軟質
23	底径18cm	直線的に立ち上がる底縁。突帯は扁平な台形を呈する。	外周2cmあたり8条の1次縦ハケ内面指ナシ。粘土帯の積み上げによる底縁。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	中や軟質
24	底径16cm	底縁は中や外縁しながら立ち上がる。突帯は扁平な台形を呈する。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面指ナシ。底部は2枚の粘土帯を貼り合わせて底縁。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	中や硬質
25	底径15.4cm	直線的に立ち上がる底縁。突帯は扁平な台形を呈する。	外周1.5cmあたり5条の1次縦ハケ。内面指ナシ。底部は粘土帯を2枚貼り合わせて底縁。	赤褐色	雲母、砂粒、小石	中や硬質

第2表 円筒埴輪観察表



第192图 2号墳出土馬形轆轤実測図



第20图 2号墳出土人物埴輪突頭図



3 南原古墳

本墳は2号墳から浅い谷を一つ挟んで南へ約180mのところを位置する。標高は91m前後で、他の2基の古墳とほぼ同じ高さである。現在、墳丘の一部が残り円墳状を呈しているが、これは墳丘の半分ほどが他の古墳同様、水田耕作により削平されていたため、調査の結果、前方後円墳であることが確認できた。

(1) 墳形と規模 (第21図)

本墳は、前方部を西に向ける全長約35mの前方後円墳である。今回の調査では、開発区域外にあたる部分に墳丘が残存し、その部分が後円部にあたることから、正確な規模を把握することはできなかった。残存する墳丘部も現地表面から約2mと、あまり高くない。第21図からもわかるように、括れ部があまり括れない。但し、括れ部において周溝底部のローム地山を削り残し迫り出させ、また、前方部側の周溝を浅く、後円部側の周溝を深く掘ることにより、明らかに前方部と後円部を意識して造られている。確認面における周溝の幅は、後円部E-E'ラインで4.8mと一番広く、括れ部が3.2mと一番狭い。

周溝内の埋土状況は、前方部側の浅い方は、4層→3層→2層→1層の順で堆積し、後円部側の深い方では、4層→3層の間に5層が薄く入る。d～f層までは、古墳の周辺で、現在も行なわれている水田耕作に伴う層で、a・b層は倉庫建設に先立つ整地層である。このことからわかるように、倉庫建設に際しての整地以前の水田耕作の時点で、すでに墳丘の一部が削平されていたことになる。

埋葬主体部と考えられる遺構は、今回の調査区内においては確認できなかった。但し、周溝内からは、1・2号墳同様に、長軸約1m前後の土坑が3基確認できた。

(2) 周溝内埋葬施設

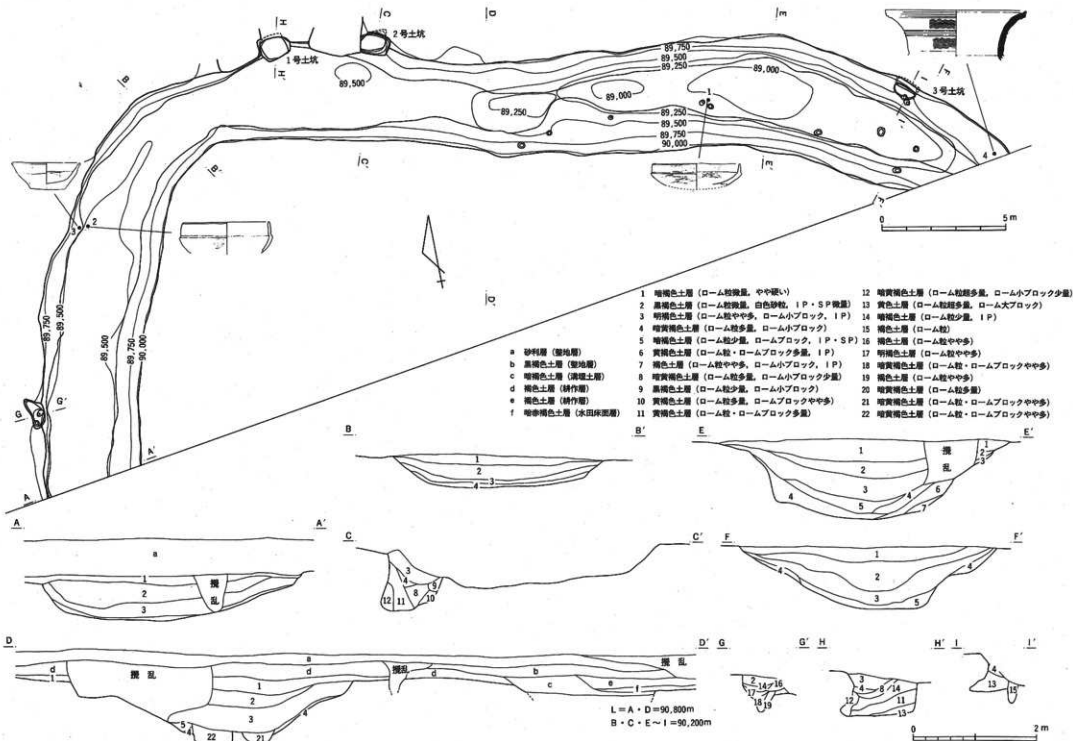
本墳からも1・2号墳同様、周溝内から土坑が確認でき、埋葬施設と考えられる。1号・2号土坑は前方部側に、3号土坑は後円部側に掘り込まれていた。形態的には、1号・2号土坑は、1号墳の土坑と同様なのに対し、3号土坑は2号墳の土坑に似ている。

土 坑

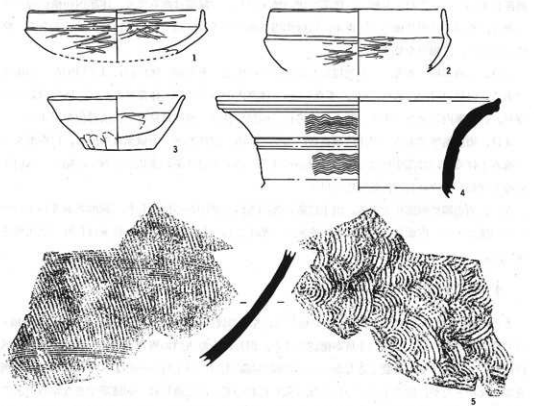
1号土坑は、前方部側に位置する。長軸1.2m、短軸0.9m、深さは確認面から90cmの長方形土坑で、周溝外側壁を垂直に掘り込み、底部付近で外側にややえぐり込んでいる。

2号土坑は、1号土坑から東へ約2.8mのところを位置する。西の一部が擾乱により不明瞭であるが、長軸1.2m、短軸0.9m、現地表面からの深さ70cmの長方形土坑で、形態、規模とも1号土坑とほぼ同様である。

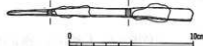
3号土坑は、2号土坑から東へ約20.5mの後円部側に位置する。長軸0.9m、短軸0.4m、深さ45cmの長方形土坑で、他の土坑に比べて規模は一番小さいが、しっかりと壁外側にえぐり込んでいる。また、開口部分には穴が2個確認でき、セクションからもこの土坑に関係するものと考え



第21図 南原古墳平・断面図



第22図 南原古墳出土土器実測図



第23図 南原古墳出土鉄器実測図

られる。

なお、土層観察により、土坑埋土上層に4層と3層が入り込むことから、他の古墳同様、主体部埋葬後、近い時期に、順を追って3基の土坑が掘られたものと考えられる。これらの土坑から遺物は出土していない。

(3) 出土遺物 (第22図・第23図)

本墳から出土した遺物は、須恵器壺2点、土師器杯2点、土師器碗1点、鉄器1点である。

1は、土師器杯である。出土状況は、後円部周溝内3層下層より散在して出土している。

口径14.0cm、器高約4.2cm。底部は欠損しているが、丸底で、体部外面に稜を有し、口縁部は直立する。体部内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ後横位のヘラミガキ。胎土に砂粒を含むが緻密で、焼成は良好、暗褐色を呈する。内面漆付着。

2は、土師器坏である。出土状況は、前方面周溝内3層中から出土している。口径は14.2cm。底部は欠損しているが、丸底で、体部に緩い稜を有し、口縁部は直立する。体部内面横位のヘラミガキ、外面ヘラ削り後ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ。胎土には赤色粒、砂粒を含み、焼成は良好で、淡褐色を呈する。

3は、土師器碗である。2と近接した位置からの出土であるが、層的には2層中からの出土である。口径11.1cm、底径5.6cm、器高4.3cm、体部内面ヘラナデ、体部外面ナデ、底部付近ヘラ削り、口縁部内外面ヨコナデ。胎土は赤色粒、砂粒を含み、焼成は良好で、淡褐色を呈する。

4は、須恵器壺である。出土位置は後円部側である。口径23cm。口縁部は外反し、口唇部をやや横み上げる。口縁部中央に2条の沈線が廻り、その上下に9条の波状文を施す。胎土には白色砂粒を含む。焼成は良好、暗灰色を呈する。

5は、須恵器壺胴部片である。出土位置は後円部側1層中から出土した。胴部外面浅い平行タタキの後カキメ、内面は同心円タタキを施す。胎土には白色砂粒を含む。焼成は良好、暗灰色を呈する。

4 土坑群

本古墳群内には、古墳の周溝内土坑の他にも、古墳の周辺には多数の土坑が存在する。1号墳・2号墳の周辺からは、10基の土坑が確認できた。但し、南原古墳の周辺からは、今回の調査区域内においては、1基も確認できなかった。時間の制約上、7号土坑の一部と9号・10号土坑は調査できなかったが、他の土坑について見る限りにおいて、出土遺物は一切確認できなかった。このため、これらの土坑群の時期を断定することは不可能であるが、その配置・形態等から見て本古墳群が造られた時期に近い時期の所産と考えておきたい。

1号土坑

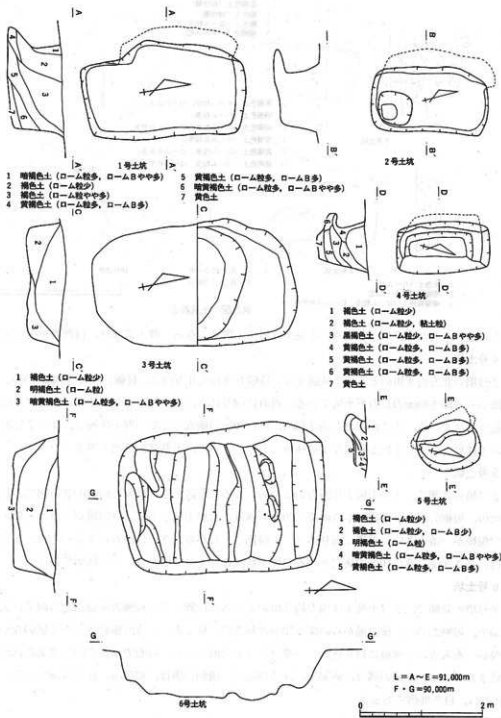
1号墳の南東方向約20mのところを位置する。長軸方向は南北方向で、長軸2.6m、短軸1.3m、確認面からの深さ85cmの長方形土坑である。垂直に掘り込み、底部で西方向にえぐり込む。えぐり部は、高さ30cm、奥行30cmの横穴となる。埋土状況を見ると、土坑底部付近に4～6層、いわゆるローム主体の層がみられる。土の具合は、締まっているが突き固めたような状態ではないことから、天井部の崩落層とも考えられる。

2号土坑

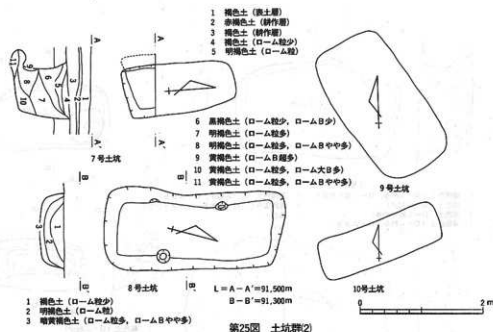
1号墳の東方約12mのところを位置する。長軸方向は南北方向で、長軸1.9m、短軸1.02m、確認面からの深さ75cmの長方形土坑である。垂直に掘り込み、底部で西方向にえぐり込む。えぐり部は、高さ15cm、奥行35cmの横穴となる。土坑南壁に、さらに1段低い土坑が掘られている。

3号土坑

1号墳の北東方向約13mのところを位置する。長軸方向は南北方向で、長軸3.15m、短軸1.95m、確認面からの深さ56cmの長方形土坑である。時間の制約上半分しか掘れなかったが、他の土



第24图 土坑群(1)



第25号 土坑群2)

坑とは違い、ただ垂直に掘り込み、中央がさらに1段低くなる。埋土状況は、自然堆積である。

4号土坑

2号墳の北方約4mのところに位置する。長軸方向は南北方向で、長軸1.5m、短軸0.85m、確認面からの深さ80cmの長方形土坑である。垂直に掘り込み、途中からえぐり込み、さらに1段低く掘り下げている。えぐれ部は、高さ15cm、奥行20cmの横穴となる。埋土状況は、4～7層がローム主体層で、1号土坑と同様な土の状態であることから、天井部崩落層と考えられる。

5号土坑

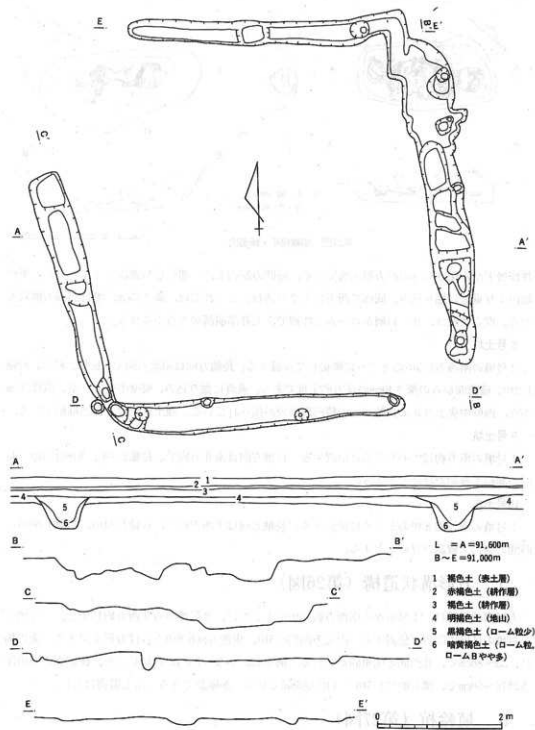
2号墳の北側で、4号土坑より西方約5mのところに位置する。長軸方向は南北方向で、長軸1.02m、短軸0.80m、確認面からの深さ20cmの隅丸長方形土坑である。今回確認された土坑のなかで規模が一番小さい。垂直に掘り込み、1段低くしながら、さらに西方にえぐり込む。えぐれ部は、高さ20cm、奥行10cmの横穴となる。埋土状況は、4・5層がローム主体層である。

6号土坑

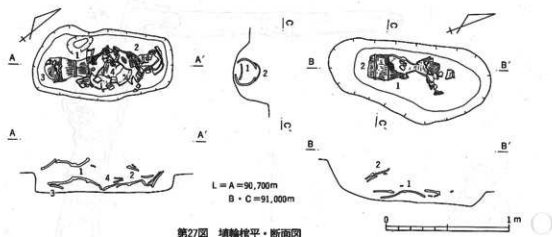
2号墳の北側で、5号土坑より西方約3mのところに位置する。長軸方向は南北方向で、長軸3.35m、短軸2.25m、確認面からの深さ70cmの長方形土坑である。今回確認された土坑のなかで規模が一番大きい。垂直に掘り込み、一端フラットな面をもち、底面で東西方向に2条の溝が掘り込まれている。北側の溝は、幅50cm、深さ10cmで、南側の溝は、幅75cm、深さ5cmである。埋土状況は、自然堆積である。

7号土坑

5号土坑より北方1.5mのところに位置する。長軸方向は南北方向で、長軸1.8m、短軸0.8m、



第266图 方形溝状遺構平・断面图



第27図 埴輪椁平・断面図

耕作層下から深さ85cmの長方形土坑である。時間の制約上、一部分しか確認できなかった。黒色地山より垂直に掘り込み、底部で西方にえぐり込む。えぐれ部は、高さ25cm、奥行25cmの横穴となる。埋立状況は、9～11層がローム主体層で、天井部崩落層と考えられる。

8号土坑

2号墳の南西方1.5mのところ隣接して位置する。長軸方向は南北方向で、長軸2.85m、短軸1.2m、確認面からの深さ40cmの長方形土坑である。垂直に掘り込み、東壁中央より南に直径20cmの穴、西壁中央より北に長軸15cmの楕円形の穴が掘られている。埋土状況は、自然堆積である。

9号土坑

1号墳の南方約12mのところ位置する。長軸方向は南北方向で、長軸2.4m、短軸1.3m。時間の制約上確認だけにとどまる。

10号土坑

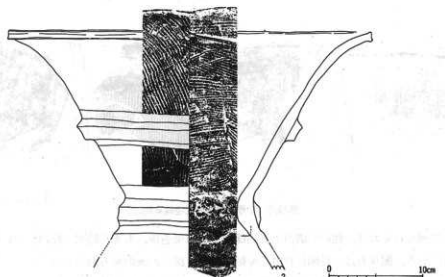
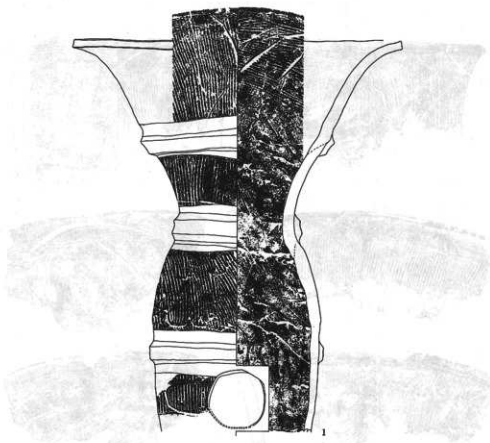
1号墳の南方約8mのところ位置する。長軸方向は東西方向で、長軸2.04m、短軸0.66m。時間の制約上確認だけにとどまる。

5 方形溝状遺構 (第26図)

方形溝状遺構は、1号墳から南西方約16mのところ、2号墳から北西方約15mと、1号墳と2号墳のほぼ中間点に位置する。南北方向約6.5m、東西方向6.6mとほぼ方形を呈する。溝の幅は、35～80cmで、北西隅と南東隅が切れる。溝中は、かなり凹凸がはげしいが、確認面からの深さは10～50cmで、部分的に1.5m～3mの間隔でピットが確認できる。出土遺物はない。

6 埴輪棺 (第27図)

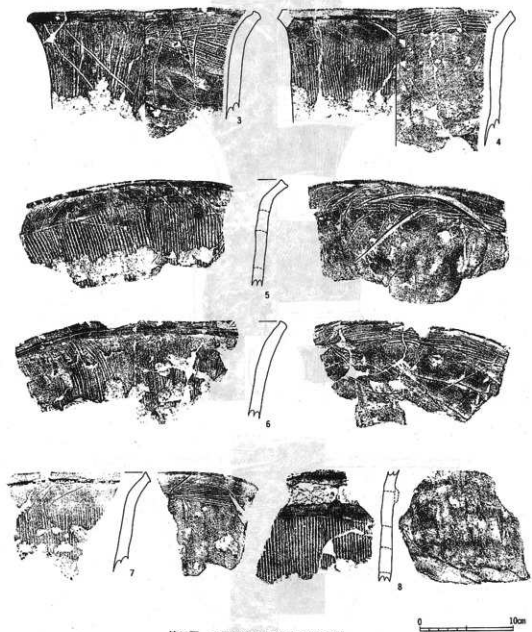
埴輪棺は今回の調査区内から2基確認できた。



第28図 1号墳輪郭構成墳輪実測(図1)

1号墳輪郭

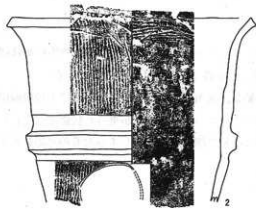
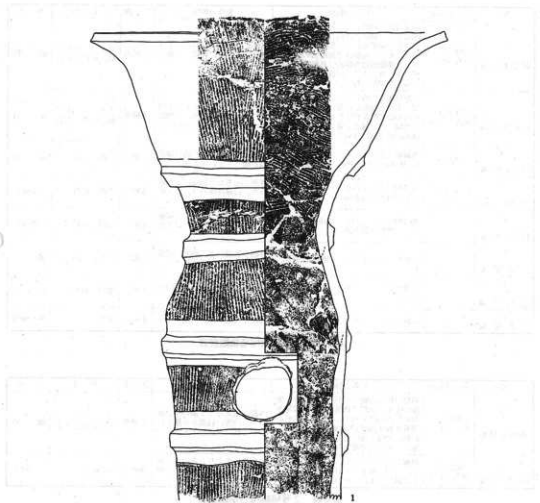
2号墳の南西周溝外側に隣接し、2号墳Cラインセクションからもわかるように、10層を切り



第29図 1号埴輪棺構成埴輪実測図(2)

込んで掘られており、他の周溝内土坑同様、2号墳築造後、あまり時間が経過しない段階で埋葬されている。掘り方は、長軸1.12m、短軸0.57m、深さ25cmの長方形である。

埴輪棺を構成している埴輪は、朝顔形埴輪(1・2)と円筒埴輪(3～7)で、いずれも胴部以下を欠損している。2の朝顔形埴輪に4の円筒埴輪を組み合わせ、1の朝顔形埴輪と合わせ口にしてある。さらに、開いている両側に円筒埴輪を立て掛けて塞いでいる。



第30图 2号墙轴测构成墙轴测图

No	寸法(cm)	形態の特徴	製作の特徴	色調	胎土	構成
1 朝顔形埴輪	口径35.3 残存高41.5	胴部は細く内傾しながらすぼまり、胴部に至る。胴部には他の突帯内側扁平な台形の突帯を有す。胴部には円形の透孔を有す。朝顔部は直線的に外傾し、口縁部で強く外反する。口縁部の接合部には扁平な突帯を有す。	外周2.7cmあたり11条の1次縦ハケ。内周口縁部のみ横ハケで、以下ナデ。	赤褐色	赤色スコリア粒、砂粒、小石	硬質
2 朝顔形埴輪	口径39.0 残存高25.0	胴部は細く内傾しながらすぼまり、胴部に至る。胴部には他の突帯内側扁平な台形の突帯を有す。胴部には円形的に外傾し、口縁部で強く外反する。口縁部の接合部には扁平な突帯を有す。	外周2.6cmあたり8条の1次縦ハケ。内周口縁部のみ横ハケにかけて横ハケ、以下ナデ。	赤褐色	赤色スコリア粒、砂粒、小石	硬質
3 円筒埴輪	口径24.8	直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。外周に2本の沈線によるヘケ筋を有す。	外周1次縦ハケ。内周口縁部のみ横ハケで、以下ナデ。	赤褐色	砂粒、小石	硬質
4 円筒埴輪	口径25.4	直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は面を持つ。	外周3cmあたり10条の1次縦ハケ。口縁部横ハケ。以下ナデ。	赤褐色	霞母、砂粒	やや硬質
5 円筒埴輪		直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は面を持つ。	外周3cmあたり10条の1次縦ハケ。口縁部横ハケ。以下ナデ。	赤褐色	霞母、砂粒	やや硬質
6 円筒埴輪		直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	外周1次縦ハケ。内周口縁部のみ横ハケで、以下ナデ。	赤褐色	砂粒、小石	硬質
7 円筒埴輪		直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。	外周1次縦ハケ。口縁部内側横ハケで、以下ナデ。	赤褐色	霞母、砂粒	硬質
8 円筒埴輪		直線的に立ち上がり、突帯を有す。	外周1次縦ハケ。内周ナデ。	赤褐色	砂粒	やや硬質

第3表 1号埴輪性埴輪観察表

No	寸法(cm)	形態の特徴	製作の特徴	色調	胎土	構成
1 朝顔形埴輪	口径38.2 残存高49.5	胴部は細く内傾しながらすぼまり、胴部に至る。胴部には他の突帯内側扁平な台形の突帯を有す。胴部には円形の透孔を有す。朝顔部は直線的に外傾し、口縁部で強く外反する。口縁部の接合部には扁平な突帯を有す。	外周2cmあたり7条の1次縦ハケ。内周口縁部のみ横ハケにかけて横ハケ、以下ナデ。	赤褐色	赤色スコリア粒、砂粒、小石	硬質
2 円筒埴輪	口径26.6 残存高19.6	直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。突帯は扁平な台形を有する。上から2段目に内側円形の透孔を有する。	外周2cmあたり7条の1次縦ハケ。口縁部内側横ハケ、以下ナデ。	淡褐色	砂粒、小石	やや硬質

第4表 2号埴輪性埴輪観察表

2号埴輪棺

2号墳の北西方約5mのところまに位置する。掘り方は、長軸方向がほぼ南北方向を向き、長軸1.32m、短軸0.6m、確認面からの深さ25cmの不整長方形である。

埴輪棺を構成している埴輪は、朝顔形埴輪(1)と円筒埴輪(2)で1号埴輪棺同様、胴部以下が欠損している。1の朝顔形埴輪の上に2の円筒埴輪片が乗った状態で出土した。1の口縁部付近の一部は、重機で表土を剥ぐ際に一緒に削り取られてしまったものと思われる。


IV まとめ

今回の調査により、南原古墳以外に2基の円墳が確認され、本地域内に古墳群が存在していたことが判明した。当然、古墳群の構成は3基に止まらず、実際には調査区外にも、すでに耕作により削平されてしまった古墳が存在した。聞き取り調査の結果、少なくともこの他に2基の古墳が存在していたと考えられ(第2回周辺遺跡分布図内1の点線内○の位置)、1基は河原石を使用した石室をもち、その中から直刀も出土したとのことである。残念ながら現時点でこれを確認する術はない。よって、この古墳群の全貌を明らかにすることはできないが、今回調査ができた3基の古墳の年代的位置付けをすることにより、本古墳群の一端を明らかにしてみたい。なお、3基の古墳のうち、南原古墳と1号・2号墳の間には浅い谷が入る。このことから本来は別の支群と考えることもできるが、ここでは古墳群の全貌がわかっていないこともあり、両者を合わせて下桑島西原古墳群として検討していきたい。

1 円筒埴輪について

まず、2号墳出土の円筒埴輪について整理してみる。

量的にはかなり多くの埴輪片が出土しているが、全体像のわかる円筒埴輪は1個体もない。但し、各部位を組合せて考えてみると、次のようにまとめることができる。

- ①器形は筒形もみられるが、底部からやや開くものが多い。
- ②外面整形は途中でとめたりつぎたりする第1次ハケ整形である。
- ③内面整形は口縁部に横ハケ整形をし、それ以下は指ナアあるいはナア整形である。
- ④透孔は円形で、胴部(第1段)に穿たれている。
- ⑤突帯は扁平な断面台形で、2条突帯である。
- ⑥口縁部外面に「」の線刻がみられるものがある。
- ⑦色調・胎土は、硬質で赤褐色のものと、軟質で淡褐色の2種類みられる。

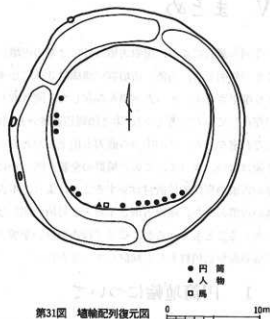
以上の点から、「栃木県域における埴輪の諸問題」の中で石川・森田・小森3氏が出された円筒埴輪の変遷試案に照らし合わせると、IV段階以降の様相を示す。

また、円筒埴輪の配列について復元したものが第31図である。円筒埴輪は、その出土状況から別個体のものが等間隔に転落している状況が窺える。このことから、埴輪列は一重で、西から南墳裾に据えられていたものと考えられる。形象埴輪は、これら円筒埴輪列のほぼ中央に、人と馬がセットで据えられていたと考えられる。このような形態は、大沢氏が検討した円筒埴輪列の4型式に属し、6世紀中葉～末の年代が考えられている。

2 形象埴輪について

2号墳からは人物と馬の形象埴輪が出土している。県内において、人物と馬が併伴して出土し

ている例（出土状態が近接しているとは限定せず）は、摩利支天塚古墳、上原3号墳、稲荷2号墳、猿塚古墳、明神山5号墳が挙げられる。この中で、現時点では、摩利支天塚古墳が一番古く、西暦500年前後の時期に位置付けられている。この中で上原3号墳と明神山5号墳は、人物と馬が近接した位置から出土しており、人物のポーズも左手を挙げ右手を下げているなど、本古墳出土の形象埴輪と同様の状況を示す。大沢氏は、明神山5号墳出土人物埴輪の腰部背面にカマ痕があることに注目し、このような形態の人物埴輪を「馬飼い」と位置付けている。本墳出土の人物埴輪についても、先に述べたような共通点があるものの、



第31図 埴輪記列復元図 0 10m

多少違った点が見られる。腰部が欠落しているため、カマの有無は確認できない。この人物埴輪は、乳房がある。頭には突帯を纏らしていることから、鉢巻を頭に巻いている状態を示していると考えられる。また、その突帯から何かを垂れ下げているかのような貼りつけの痕が、耳穴前に残る。手も左手を挙げ右手を下げているが、真横ではなく、やや前後させている。以上の点から想像を逞しくすれば、垂れ飾りを付けた鉢巻をした女性が踊っている状態を表現しているとも考え、**「踊る埴輪」**とも考えられる。製作技法において、顔面の粘土板成形、腕の作りが中実式であること、耳袋の省略などから、6世紀中葉以降の人物埴輪と考えられる。

3 2条突帯埴輪について

もう少し時期を絞り込むために、本墳出土の埴輪が2条突帯であることに着目し、県内における2条突帯埴輪と比較検討してみる。

まず始めに2条突帯埴輪の分布範囲を押さえてみたい。

第32図は突帯数別にみた埴輪を持つ古墳の分布図である。この分布図から次のような傾向が窺える。但し、埴輪を持つことはわかっているが突帯数が不明な場合が多く、あくまでも大雑把な傾向であるが、調査例が増えればその傾向はより鮮明になると思われる。

①鬼怒川以東において、突帯数のわかるものはすべて3条突帯であり、不明なものも透孔などの位置からみて、3条以上の可能性は考えられるが、2条突帯は今のところ確認されていない。

②田川、悪川（湊川・黒川）流域に2条突帯の分布がみられる。但し、この地域は図からもわかるように3条も多条もあり、また1つの古墳においても2通りの円筒埴輪を持つ例（亀の子塚

古墳等)がある。この点に関しては、時期及び古墳の規模などを限定して考えれば、もう少し整理されると思われる。因みに、渡良瀬川流域の円筒埴輪については、全体像が不明であるが、今後2条突帯の資料が増えてくるとと思われる。

③低位置突帯埴輪の分布域と4条以上の突帯の分布域とはほぼ重なり、鬼怒川以東では、現時点において確認されていない。両者とも大型の古墳に採用される場合が多いが、中規模の古墳でも採用されている(米山古墳、水道山山頂古墳等)。

以上、大まかにみると、鬼怒川を挟んで様相が違っていることがわかる。鬼怒川以東においては常に下総・常陸との関連が考えられる地域であり、これに対し鬼怒川以西においては上野・武蔵との関連が考えられる地域である。円筒埴輪において、6世紀代になると非常に地域性を強くみせる段階となり、3条突帯は下総・常陸に一般的に見られる形態となり、2条突帯は上野・武蔵に一般的に見られる形態となるという。この指摘に従えば、本県においては、鬼怒川を挟んだ西と東で、それぞれの近接した地域との交流(埴輪工人間の技術交流、移動等)が行なわれていたとも考えられる。

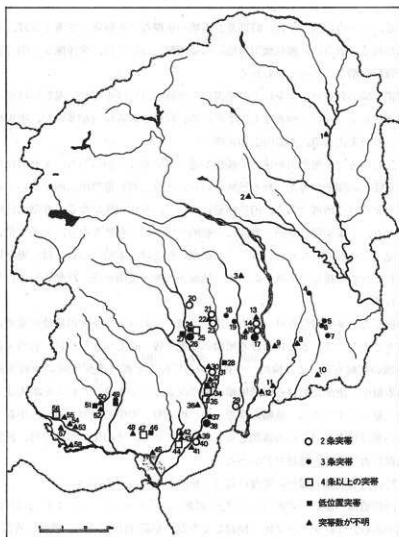
次に②で指摘した2条突帯分布域(田川・思川流域)における2条突帯埴輪の変遷についてみる。現在までのところ、本県における埴輪の変遷を扱ったものとしては、岩崎・森田両氏における小山市域の埴輪を扱ったの検討^{註⑧}、小森氏や石川氏の宇都宮南部地域の埴輪を扱ったの検討^{註⑨}、小森氏の本県中、南部における円筒埴輪の編年試表^{註⑩}があり、これらを集大成するような形で『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷』の「栃木県」の中で石川・森田・小森3氏が円筒埴輪の諸要素の変遷試表及び今後の課題をまとめられている。その後においては、秋元氏や水沼氏が銀杏葉刻線に着目しての検討などがある。

本稿では、特に円筒埴輪の器形の変遷に着目し検討を進めていきたい。

従来から、円筒埴輪の器形の変遷としては、「筒形」→「ラッパ」状へ、あるいは基部が長くなるなどの指摘がある。これをグラフ化し検討してみたのが第33図である。横軸に底径/口径、縦軸に基部の高さ/器高をとった。基部の高さについては、一般的には第一突帯(最下部突帯)を含めての数値で表されていることが多いが、断面三角形の突帯の場合はその頂点で測るとしても、断面台形の場合は測定位置がまちまちとなる。そこでここでは、突帯の付け根部分までを基部の高さとした。

これにより、大きく3つのグループに分けることができる。

- A群 底径/口径が0.65以上で、基部の高さ/器高が0.25~0.35のもの。いわゆる「筒形」状の埴輪である。浅間塚古墳、宮内2号墳、八龍塚古墳にみられる。
- B群 底径/口径が0.4~0.6で、基部の高さ/器高が0.25~0.4のもの。いわゆる「ラッパ」状に開くタイプであるが、基部は相対的に短い。八龍塚古墳、上原3号墳、稲荷2号墳、亀の子塚古墳にみられる。
- C群 底径/口径が0.4~0.6で、基部の高さ/器高が0.45以上のもの。「ラッパ」状に開くク



第32図 突箭数別にみた埴輪出土古墳分布図

No.	古墳名	墳形	規模	No.	古墳名	墳形	規模	No.	古墳名	墳形	規模
1	稲倉塚古墳	円	41 21	稲荷2号墳	前方後円	39 41	牧ノ内27号墳	円	26		
2	糠林古墳	円	20 22	下合古墳	前方後円	57 42	茶臼塚古墳	前方後円	77		
3	稲塚山古墳	前方後円	40 23	上原3号墳	前方後円	21 43	真砂門山古墳	前方後円	41		
4	千代宮古墳	円	— 24	宮田山宮田山古墳	前方後円	84(143)	三浦塚古墳	前方後円	—		
5	市橋跡塚古墳	前方後円	52 25	富士山古墳	円	65 45	赤瀬赤塚古墳	円	—		
6	地比部8号墳	前方後円	42 26	龜の子塚古墳	前方後円	43 46	葉舟塚古墳	円	65		
7	天子塚古墳	前方後円	43 27	新野塚古墳	前方後円	61 47	水山古墳	前方後円	47		
8	龜塚古墳	円	— 28	横塚古墳	前方後円	52 48	佐野八幡山古墳	円	46		
9	龜山大塚古墳	円	30 29	新野4号墳	前方後円	— 49	一畑御前神社墳	円	—		
10	新田山古墳	円	— 30	壬生堂石塚古墳	前方後円	53 50	蓮沼3号墳	円	16		
11	大和田富士山古墳	前方後円	51 31	葛塚古墳	—	—	中山8号墳	—	—		
12	上大塚1号墳	前方後円	31 32	谷塚古墳	前方後円	84(115)	小幡山古墳群	—	—		
13	龜山12号墳	円	10 33	甲塚古墳	前方後円	85 53	正徳寺古墳	前方後円	84		
14	下桑島塚古墳	円	30 34	藤塚古墳	前方後円	123 54	藤戸一二号古墳	前方後円	—		
15	磯前塚古墳	前方後円	36 35	藤野支天塚古墳	前方後円	120 55	磯神山山頂古墳	前方後円	36		
16	坂塚古墳	前方後円	100 36	龜塚古墳	前方後円	62 56	水道山山頂古墳	前方後円	35		
17	八坂塚古墳	前方後円	40 37	龜山7号墳	前方後円	36 57	磯神山古墳群	—	—		
18	磯山古墳群	前方後円	— 38	足尾塚古墳	円	33 58	小菅磯磯山古墳	前方後円	55		
19	葉宮牛塚古墳	前方後円	57 39	外塚1号墳	前方後円	40 59	—	—	—		
20	坂塚古墳	前方後円	27 40	宮内2号墳	円	28	—	—	—		

第5表 突箭数別にみた埴輪出土古墳一覽表

イブで、基部は相対的に長い。稲荷2号墳、亀の子塚古墳、足尾塚古墳、西赤堀狐塚古墳にみられる。

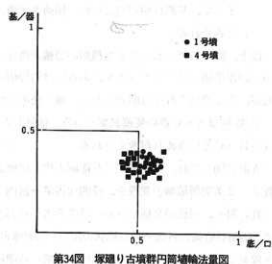
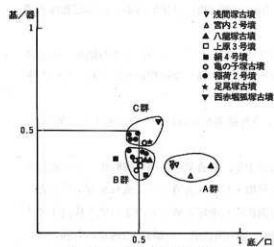
以上、同一古墳においても2種類の埴輪が供伴することがわかる。このことを時間差と捉えるか、制作集団の工人差とみるか、あるいは追加獨立とみるか、様々な解釈が考えられるわけであるが、ここではこれを時間差と考え、論を進めていきたい。

第35図はA～C群の変遷試案である。前述したような従来からいわれている考え方に従うと、A→B→Cという流れが考えられる。

A群に関しては、秋元氏が「八龍塚古墳」の検討の中で、銀杏葉形刻線の省略化という流れを捉え、2条突帯埴輪の変遷を、浅間塚古墳→宮内2号墳・八龍塚古墳という流れを提示された。これに対し、同様の文様について論文を書かれた水沼氏は八龍塚古墳と宮内2号墳を検討する中で、朝顔形埴輪の肩部突帯の形状の違い、八龍塚古墳と塚山南古墳との類似点(透孔の右側に「 \cap 」文線刻を持つ)ことなどから、宮内2号墳→八龍塚古墳という変遷を示された。浅間塚古墳については両氏ともB種ヨコハケを持つことから一番古手にしている。次に宮内2号墳がくる点に関しては共通しているが、八龍塚古墳に関しては意見が分かれる。本稿では、前述した流れによる変遷を考えている立場から、A群とB群の供伴する段階として八龍塚古墳を考え、宮内2号墳に後続する段階と捉えたい。以上のような考えに基づき、I～III段階を設定した。

IV段階については、本県において資料が非常に少ないので後述するとし、V段階についてみる。この段階の古墳として考えられるのが、亀の子塚古墳、稲荷2号墳、足尾塚古墳、西赤堀狐塚古墳である。この4古墳をさらに2つのグループに分けることができる。亀の子塚古墳と稲荷2号墳はB群とC群が供伴し、足尾塚古墳と西赤堀狐塚古墳はC群のみである。変遷上はB群とC群供伴をVa段階とし、C群のみをVb段階としたが、これを時間差と捉えるか、あるいは各古墳の個性と捉えるかは、現時点の資料では決しがたい。すなわち、亀の子塚古墳と稲荷2号墳は供伴土器などからほぼ同時期の所産と考えられるが、足尾塚古墳にしても西赤堀狐塚古墳にしてもそれぞれの供伴遺物からの時期決定が難しい古墳である。具体的に言えば、足尾塚古墳に関しては、森田氏の意見を借れば、低位置突帯埴輪が供伴すること、横穴式石室の形態などから7世紀初頃くらいの年代を考えられている。低位置突帯埴輪は本県において6世紀後半～7世紀初頃という年代幅^{註9}があり決定打に欠ける。また、西赤堀狐塚古墳は、形象埴輪、鉄鏝、刀子などが出土しているが、6世紀後半以降であることは間違いないと思われるが、さらに時期を絞りこむことは難しい。今後の資料の増加を待ち、時期の問題であるか、あるいは地域の問題であるかは検討していくとし、ここでは、VaとVbを同一時期の範囲内で捉えておきたい。

最後にIV段階であるが、本県における資料があまりにも少ないために検討の余地は残る。そこで、対象地域から外れるが、本県に接する群馬県太田市所在の塚廻り古墳群のデータを使い同様のグラフを作成してみた(第34図)。ほぼB群の範囲内におさまる。塚廻り古墳群の築造時期は6世紀の第2四半期～第3四半期^{註10}と考えられており、本県において資料が不足している時期に当



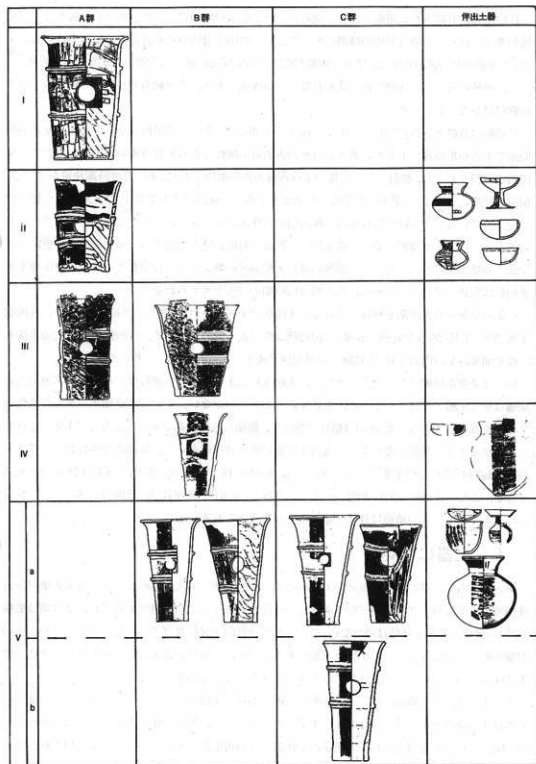
たる。この結果、Ⅲ段階とⅤ段階を埋めるものとして、B群のみで構成される段階を考え、これをⅣ段階としたい。

以上Ⅰ～Ⅴ段階までの変遷を考えたが、次に、それぞれの段階の実年代について少し考えてみる。

Ⅰ段階は2条突帯埴輪においてB種ヨコハケを持つ段階である。B種ヨコハケの採用は川西編年におけるⅢ～Ⅳの段階である。本県で、B種ヨコハケを持つ埴輪を出土している古墳としては佐野八幡山古墳、笹塚古墳、塚山古墳、兼57号墳などが挙げられる。いずれも川西編年のⅢ～Ⅳの段階に位置付けられている。浅間塚古墳に限って見れば、その線刻の特殊性から塚山古墳群との関連が考えられている。同様のB種ヨコハケを持つ塚山古墳は最近の調査により、TK 73～208型式段階の須恵器墓、蓋環が出土している。浅間塚古墳からは3個体の埴輪が出土しているが、それぞれ外面調整が微妙に異なる。B種ヨコハケを部分的にもつもの、C種ヨコハケを部分的にもつもの、タテハケ1次調整のみのものである。これらは川西編年Ⅳ期には位置付けられるものの、やや新しい様相を示す。

Ⅱ段階はA群のみで構成されるがタテハケ1次調整のみとなる段階である。これは川西編年におけるⅤ期にあたり、川西氏はⅤ期の上限をTK 23の時期としている。但しⅣ期の新しい段階においては、外面の2次調整の粗雑さや省略が目立つようになるという。宮内2号墳ではTK 208型式の須恵器が出土している。供伴する土師器においては、和泉期の範疇で捉えられるもの、高坏・椀などに新しい様相がみられるとの指摘がある。ここでは須恵器の年代も蓋みTK 208以降としたい。

Ⅲ段階は、A群とB群が供伴する段階である。供伴遺物がなく、実年代の検討が直接できないが、前述したように塚山南古墳との関連が考えられることから、5世紀末～6世紀初頭と考えておきたい。



第35图 2条突带钟形铜壶类图

scale 1/16

IV段階は、B群のみの段階である。現時点では上原3号墳の資料だけであるが今後増える可能性が考えられる。上原3号墳の時期については、その出土遺物から6世紀後半段階が示され、また、古墳群全体の流れの中で、埋葬主体部が横穴式石室採用以前との位置付けがなされている。^{註⑤}また、地域が違おうが、塚廻り古墳群もB群のみの構成であり、6世紀第2四半期～第3四半期の位置付けがなされている。

V段階はB群とC群が供伴(Va)、あるいはC群のみ(Vb)の段階である。VaとVbが時間差であるか地域差であるか、あるいはその古墳毎の個性であるかは今後の課題としておく。V段階の資料としては、稲荷2号墳と亀の子塚古墳が供伴遺物をもち、ある程度時期決定ができる。稲荷2号墳については、梁木氏が聖山2号墳出土土器との検討によりTK 43型式以降との位置付けをされている。第35図では、亀の子塚古墳の供伴土器を示しておいた。土師器^{註⑥}は1点だけではあるが、内面ナデ調整であり、量法的にも稲荷2号墳の坏と類似する。須恵器^{註⑦}は形態的には聖山2号墳出土のものに近いが、頸部の波状文や胴部の刺突文などは崩れている。須恵器^{註⑧}も形態的には似通っていることから、両古墳は同時期の所産と考えられる。

上記の基準から各段階を整理してみる。I段階はTK 73～TK 208(5世紀後半前葉)、II段階TK 208～TK 23(5世紀後半後葉)、III段階は5世紀末～6世紀初頭、IV段階は6世紀前半後葉～後半前葉、V段階はTK 43以降(6世紀後半後葉～7世紀初頭)と考えておきたい。

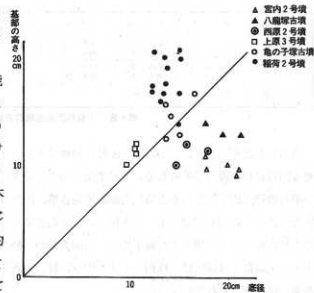
以上2条突帯埴輪についてみてきたが、次に本墳出土の埴輪を位置付けてみたい。本墳出土の埴輪は事実記載でも述べたように、全体像のわかるものがない。そこで、既知データから埴輪の全体像を推定してみる。第36図は横軸に底径を、縦軸に基部の高さをとったものである。これからわかるように基部に関しては、宮内2号墳に近い計測値を示し、基部の高さにおいてもA・B群の範囲内である。底径/口径については、底径が15.4～18cmであり、口径が24.8～30.6cmである。これらの数値を使い平均値を出してみると、0.61とほぼB群の範囲内に当たる。これらのことから本墳出土の埴輪はB群に属するものと考えられる。

4 土器について

本古墳群内の3基の古墳の概要をまとめたものが第6表である。墳形の上では南原古墳が前方後円墳で、1号墳・2号墳が円墳であるという違いがあるが、出土遺物の点では、2号墳は埴輪を持ち、南原古墳・1号墳は持たない。このことは時間的差異に基づくものなのであろうか。この問題を解く手がかりとなるのが出土土器である。但し、この検討に入る前にそれぞれの土器の出土状態について、いくつか注意しておかなければならない点がある。

まず1つは、1号墳出土の1・3の出土位置である。第三章1でも述べたように、この2つの土器は木棺墓直上よりの出土である。本墳の埋葬主体部が、墳丘が削平された今どこにあったかは不明と言わざるを得ないが、木棺墓が主体部だった可能性が考えられる。近隣に目を転じてみると、宇都宮市の西部に位置する聖山公園2号墳でも同様の大型土坑が確認されている。但し、

墳丘上に2基の隅丸長方形の土坑が存在する。この内の1基より鉄先状鉄製品が出土している。この例からすると、本墳も墳丘部に埋葬主体部があった可能性は十分考えられるが、本墳の木棺墓には、直刀・刀子・鉄鏝と、このクラスの古墳の副葬品としては十分に足りるだけの内容があり、仮に、聖山2号墳のような隅丸長方形の土坑があったとしても木棺墓の堀り方からすればやや貧弱な感じを受ける。また、聖山公園2号墳から約3km南にある上原古墳群3号墳においても同様な周溝内の埋葬施設が確認されている。この古墳は全長約20mの帆立貝式の



第36図 2条突審輪における底径と基部の高さ

の前方後円墳で墳丘も存在したが、墳丘部分には埋葬主体部は確認されなかった。周溝内の埋葬施設(1号墳穴)からは大刀及び管玉が出土している。この2例及び本墳だけで、到底結論をだすわけにはいかないが、このような大形の周溝内埋葬施設が埋葬主体部である可能性が考えられる。また、埋葬施設が「変則的」な位置にあるという点では広い意味での「変則的古墳」ということができ、さらに、本墳を含めた周辺地域が、岩崎氏のいわれる「地下埋葬を共有する集団」の中にあつて、「さらにそれらが原則を共有しながらも、さらにいくつかの地域圏に細別」されたうちの1つの地域圏として捉えられないだろうか。

話がそれだが、以上のことも含め、Aラインセクションの観察から本墳の埋葬開始時期に近い時期に木棺墓が掘られ、埋葬され、そしてその祭祀用として使用した土器が1・3である。2も形體的に近いことから1~3の土器を本墳の時期を代表させるものとして取り扱っていきたい。

2つ目としては、2号墳出土の土器に時間差があるという点である。第37図の1と2は、ほぼ同一の層位であるが、形體的に時間的ずれがある。2はTK 217 型式以降、供膳用の器形の一つとして現われるものである。須惠器の実年代に関しては、文献・紀年銘遺物等の検討により様々な年代観が示されているが、TK 217 に関しては概ね7Cを遡ることはないようである。これに対し、1は、口唇部の作り、波状文の施文状況、胴部内面の同心円文を消している点、胴部外面格子タタキ目の細かさ等、陶器I 型式の様相を示す。このように2つの土器は1世紀近い隔りがある。これに対し、古墳に確実に伴うと思われる埴輪は、先の検討から6世紀前半後半〜後半前葉と考えられることから、土器との隔りがあるが、1がI 型式の名残を残す土器と考えることができれば、埴輪の年代との擦り寄せが可能とも考えられる。

以上、2点に考慮し、各古墳の土器を検討してみる。須惠器墓に関してみると、2号墳出土が

古墳名	墳形	墳丘径 (m)	全径 (m)	周溝の深さ (m)	周溝内埋溝数	出土遺物
1号墳	円墳	東西 16.5 南北 16.7	東西 22.2 南北 23.4	0.3~0.6	7	土師器杯2, 須恵器壺1
2号墳	円墳	東西 20.5 南北 20.5	東西 27.5 南北 29.5	0.8~1.2	3	埴輪 (内腹・外・人物), 須恵器 (壺1・共腹段1)
南原古墳	前方後円墳	主軸 約35		0.5~1.3	3	土師器 (杯2・段1), 須恵器壺2, 鉄剣1

第6表 下島島西原古墳群古墳一覧表

一番古い形態を示すが、その出土状況が微妙である。1号墳と南原古墳出土のものは、頸部を廻る凹線にやや違いがみられる。1号墳出土の方が完全に沈線化している。このような沈線をもつ須恵器壺を出土している古墳は馬頭町川崎古墳、国分寺町山王塚古墳、石橋町下石橋愛宕塚古墳など、いずれも6世紀末葉~7世紀にかけての古墳にみられる。また土師器杯においても、南原古墳に比べ、1号墳の方が扁平化し、内面調整の省略もみられることから、針ヶ谷新田1号墳出土の土師群とほぼ同様の様相を示す。因みに針ヶ谷新田1号墳の土師群は6世紀末葉~7世紀前葉に位置付けられている。

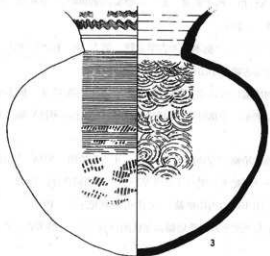
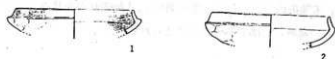
5 小 結

以上、出土遺物について見てきたわけであるが、最後に、3古墳の築造順序と古墳群について述べてまとめたい。

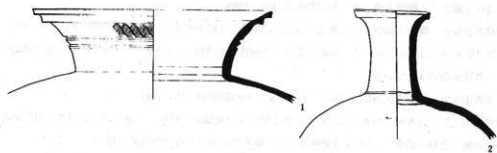
上述したように、埴輪、土器等の検討から、2号墳→南原古墳→1号墳の順が考えられる。2号墳は埴輪の検討から6世紀中葉頃の年代が考えられ、1号墳が土器の検討から6世紀末葉~7世紀前葉頃と考えられる。しかし、先にも問題点として触れたように、遺物の出土状況にやや不安な点は残る。また、埴輪の変遷案についても、伴出遺物の検討が資料的制約から十分でなく、今後の資料の増加を待ち、さらに検討していきたい。

ここまで古墳の年代的なことについてののみ紙面を費やしてきたが、最後に、古墳群全体についてみる。本古墳群において注目すべき点は、周溝内外に存在する土坑群である。残念ながら土坑からの出土遺物はなく、時期を断定することはできないが、1号墳・2号墳を中心に配されていることから、古墳群築造時期とほぼ並行かやや後出する時期の所産と考えられる。橋本氏はこの土坑の在り方を、「埋葬序列における血縁的、階層的な差異を表現」したものと指摘されている。また、周溝内の長方形の大型土坑であるが、前述したように、聖山公園2号墳や上原3号墳など、現時点では、宇都宮市南部周辺のみに見られる埋葬形態である。このことは、古墳の地域性を示す1つの指標となるのではあるまいか。今後の資料の増加をまち、さらに検討を続けていきたい。

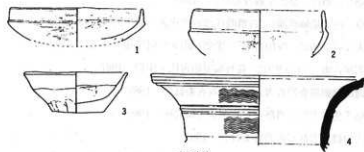
歴史的環境のところで見たとように、本古墳群を含む周辺地域には、多数の古墳群が存在し、これらは、現時点のところすべて後期古墳と考えられる。また、周辺の集落遺跡に関しても、古墳時代後期以降の集落が目立つ。このような周辺の状況から考えて、本古墳群は、新たな道具と



1号墳



2号墳



南原古墳










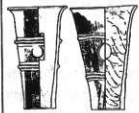
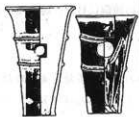

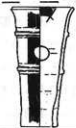
第37回 各古墳出土土器集成図

技術の導入により、未開拓地であったこの地を開墾し、「動産私有を基礎にし、その相対的自立の方向」を歩んだ人々の墓域の一部であったと考えられる。

註

- ① 石川均・森田久男・小森哲也「栃木県域における埴輪の諸問題」『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性—』1985
- ② 大沢伸啓「円筒埴輪について」『栃木県考古学会誌』第12集 栃木県考古学会 1990
- ③ 岩崎卓也ほか「摩利支天塚古墳」小山市教育委員会 1983
- ④ 大沢伸啓「馬飼いの人物埴輪について」『栃木県考古学会誌』第13集 栃木県考古学会 1991
- ⑤ 男性でも胸の表現がある例が、千葉県小貝川町城山1号墳出土の男性埴輪にあるとの御教授を橋本博文氏から戴いた。
- ⑥ 若松良一「3 人物・動物埴輪」『古墳時代の研究 9 古墳III 埴輪』雄山閣 1992
- ⑦ 財団法人文化財センター「房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)」1992
- ⑧ 岩崎卓也・森田久男「小山市域の円筒埴輪」『小山市史研究』1 1978
- ⑨ 小森哲也「宇都宮市笹塚古墳出土の円筒埴輪の年代的位置づけ」『藤考古』第2号宇都宮大学考古学研究会 1979
- ⑩ 石川均「宇都宮市塚山古墳群出土の埴輪について」『専修考古学』第1号 専修大学考古学会 1983
- ⑪ 小森哲也「栃木県内古墳出土遺物考(Ⅰ)—鉄鏃の変遷—」『栃木県考古学会誌』第8集 1984
- ⑫ 秋元陽光「八龍塚古墳」上三川町教育委員会 1989
- ⑬ 水沼良浩「塚山古墳群とその周辺」『古代』89号 早稲田大学考古学会 1990
- ⑭ 「第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性—」1985の中で坂本和俊、増田逸明など各氏が指摘されている。
- ⑮ 森田久男「小山市民病院内古墳」『小山市史』史料編原始古代 1981
- ⑯ 森田久男・鈴木勝「栃木県における後期古墳出土の埴輪の様相—最下段における「低位置凸帯埴輪」資料の紹介—」『栃木県史研究』19 栃木県史編さん専門委員会 1980
- ⑰ 大川清「西赤堀孤塚古墳」日本産業史研究所 1987
- ⑱ 石塚久則ほか「塚廻り古墳群」群馬県教育委員会 1980
- ⑲ 川西宏幸著「第四章 円筒埴輪総論」『古墳時代政治序説』塙書房 1988
- ⑳ 石部正志・斎藤恒夫・阿部知己「塚山古墳」『宇都宮市文化財年報』第8号 1992
- ㉑ 水沼良浩「二 浅間塚古墳」『壬生町史』資料編原始古代・中世 1987
- ㉒ 鈴木一男「宮内北遺跡発掘調査報告書」小山市教育委員会 1985
- ㉓ 大川清ほか「栃木県壬生町上原古墳群」日本産業史研究所 1989
- ㉔ 榎木誠ほか「稲荷古墳群」宇都宮市教育委員会 1985
- ㉕ 水沼良浩「七 亀の子塚古墳」『壬生町史』資料編原始古代・中世 1987
- ㉖ 榎木誠ほか「聖山公園遺跡1」宇都宮市教育委員会 1983

- ②岩崎卓也「関東地方東部の前方後円形古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 1992
- ③田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1983
- ④中村浩ほか「陶器Ⅲ」勉大版文化財センター 1978
- ⑤栗本誠ほか「針ヶ谷新田古墳群」宇都宮市教育委員会 1983
- ⑥橋本進朗「栃木県の円墳」『古代学研究』123 古代学研究会 1990
- ⑦近藤義郎「前方後円墳の時代」日本歴史叢書 1983

	A群	B群	C群	伴出土器
I				
II				
III				
IV				
V				
				

第35图 2条尖蒂带柄瓮类器图

SCALE 毫釐=1/16

IV段階は、B群のみの段階である。現時点では上原3号墳の資料だけであるが今後増える可能性が考えられる。上原3号墳の時期については、その出土遺物から6世紀後半段階が示され、また、古墳群全体の流れの中で、埋葬主体部が横穴式石室採用以前との位置付けがなされている。^{註⑤}また、地域が違いますが、塚廻り古墳群もB群のみの構成であり、6世紀第2四半期～第3四半期の位置付けがなされている。

V段階はB群とC群が供伴(Va)、あるいはC群のみ(Vb)の段階である。VaとVbが時間差であるか地域差であるか、あるいはその古墳毎の個性であるかは今後の課題としておく。V段階の資料としては、稲荷2号墳と亀の子塚古墳が供伴遺物をもち、ある程度時期決定ができる。稲荷2号墳については、梁木氏が聖山2号墳出土土器との検討によりTK 43型式以降との位置付けをされている。第35図では、亀の子塚古墳の供伴土器を示しておいた。土師器坏は1点だけではあるが、内面ナデ調整であり、量法的にも稲荷2号墳の坏と類似する。須恵器甕は形態的には聖山2号墳出土のものに近いが、頸部の波状文や胴部の刺突文などは崩れている。須恵器甕も形態的には似通っていることから、両古墳は同時期の所産と考えられる。

上記の基準から各段階を整理してみる。I段階はTK 73～TK 208(5世紀後半葉)、II段階TK 208～TK 23(5世紀後半葉)、III段階は5世紀末～6世紀初頭、IV段階は6世紀前半葉～後半葉、V段階はTK 43以降(6世紀後半葉～7世紀初頭)と考えておきたい。

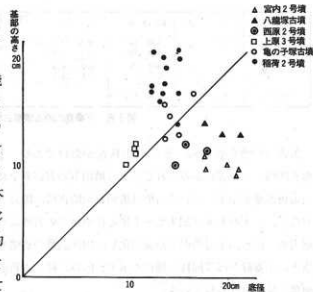
以上2条突帯埴輪についてみてきたが、次に本墳出土の埴輪を位置付けてみたい。本墳出土の埴輪は事実記載でも述べたように、全体像のわかるものがない。そこで、既知データから埴輪の全体像を推定してみる。第36図は横軸に底径を、縦軸に基部の高さをとったものである。これからもわかるように基部に関しては、宮内2号墳に近い計測値を示し、基部の高さにおいてもA・B群の範囲内である。底径/口径については、底径が15.4～18cmであり、口径が24.8～30.6cmである。これらの数値を使い平均値を出してみると、0.61とほぼB群の範囲内に当たる。これらのことから本墳出土の埴輪はB群に属するものと考えられる。

4 土器について

本古墳群内の3基の古墳の概要をまとめたものが第6表である。墳形の上では南原古墳が前方後円墳で、1号墳・2号墳が円墳であるという違いがあるが、出土遺物の点では、2号墳は埴輪を持ち、南原古墳・1号墳は持たない。このことは時間的差異に基づくものなのであろうか。この問題を解く手がかりとなるのが出土土器である。但し、この検討に入る前にそれぞれの土器の出土状態について、いくつか注意しておかなければならない点がある。

まず1つは、1号墳出土の1・3の出土位置である。第三章1でも述べたように、この2つの土器は木棺墓直上よりの出土である。本墳の埋葬主体部が、墳丘が削平された今どこにあったかは不明と言わざるを得ないが、木棺墓が主体部だった可能性が考えられる。近隣に目を転じてみると、宇都宮市の西部に位置する聖山公園2号墳でも同様の大形土坑が確認されている。但し、

墳丘上に2基の隅丸長方形の土坑が存在する。この内の1基より鉄先状鉄製品が出土している。この例からすると、本墳も墳丘部に埋葬主体部があった可能性は十分考えられるが、本墳の木棺墓には、直刀・刀子・鉄鏝と、このクラスの古墳の副葬品としては十分に足りだけの内容があり、仮に、聖山2号墳のような隅丸長方形の土坑があったとしても木棺墓の廻り方からすればやや貧弱な感じを受ける。また、聖山公園2号墳から約3km南にある上原古墳群3号墳においても同様な周溝内の埋葬施設が確認されている。この古墳は全長約20mの帆立貝式の



第36図 2条突帯壺輪における底径と基部の高さ

の前方後円墳で墳丘も存在したが、墳丘部分には埋葬主体部は確認されなかった。周溝内の埋葬施設(1号墳穴)からは大刀及び管玉が出土している。この2例及び本墳だけで、到底結論をだすわけにはいかないが、このような大形の周溝内埋葬施設が埋葬主体部である可能性が考えられる。また、埋葬施設が「変則的」な位置にあるという点では広い意味での「変則的古墳」ということができ、さらに、本墳を含めた周辺地域が、岩崎氏のいわれる「地下埋葬を共有する集団」の中にあつて、「さらにそれらが原則を共有しながらも、さらにいくつかの地域圏に細別」されたうちの1つの地域圏として捉えられないだろうか。

話がそれだが、以上のことも含め、Aラインセクションの観察から本墳の埋葬開始時期に近い時期に木棺墓が掘られ、埋葬され、そしてその祭祀用として使用した土器が1・3である。2も形體的に近いことから1~3の土器を本墳の時期を代表させるものとして取り扱っていききたい。

2つ目としては、2号墳出土の土器に時間差があるという点である。第37図の1と2は、ほぼ同一の層位であるが、形體的に時間的ずれがある。2はTK 217 型式以降、供膳用の器形の種類として現われるものである。須惠器の実年代に関しては、文献・紀年銘遺物等の検討により様々な年代観が示されているが、TK 217 に関しては概ね7Cを越えることはないようである。これに対し、1は、口唇部の作り、波状文の施文状況、胴部内面の同心円文を消している点、胴部外面格子タタキ目の細かさ等、陶器1 型式の様相を示す。このように2つの土器は1世紀近い隔りがある。これに対し、古墳に確実に伴うと思われる埴輪は、先の検討から6世紀前半後半〜後半前葉と考えられることから、土器との隔りがあるが、1がI 型式の名残を残す土器と考えることができれば、埴輪の年代との隔り寄せが可能とも考えられる。

以上、2点に考慮し、各古墳の土器を検討してみる。須惠器案に関してみると、2号墳出土が

古墳名	墳形	墳径(m)	全径(m)	周溝の深さ(m)	周溝内埋葬数	出土遺物
1号墳	円墳	東西 16.5 南北 16.7	東西 22.2 南北 23.4	0.3~0.6	7	土師器杯2, 須恵器壺1
2号墳	円墳	東西 20.5 南北 20.5	東西 27.5 南北 28.5	0.8~1.2	3	埴輪(円筒・高・人物), 須恵器(壺1・片断数1)
南原古墳	前方後円墳	主軸 約35		0.5~1.3	3	土師器(円2・筒1), 須恵器 壺2, 鉄器1

第6表 下島島西原古墳群古墳一覧表

一番古い形態を示すが、その出土状況が微妙である。1号墳と南原古墳出土のものは、頸部を廻る凹線にやや違いがみられる。1号墳出土の方が完全に沈線化している。このような沈線をもつ須恵器壺を出土している古墳は馬頭町川崎古墳、国分寺町山王塚古墳、石橋町下石橋愛宕塚古墳など、いずれも6世紀末葉~7世紀にかけての古墳にみられる。また土師器杯においても、南原古墳に比べ、1号墳の方が扁平化し、内面調査の省略もみられることから、針ヶ谷新田1号墳出土の土師器とほぼ同様の様相を示す。因みに針ヶ谷新田1号墳の土師器は6世紀末葉~7世紀前葉に位置付けられている。

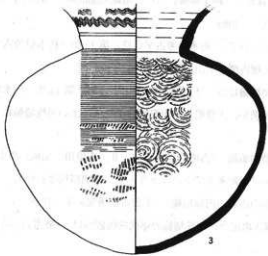
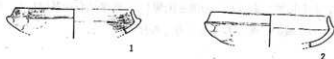
5 小 結

以上、出土遺物について見てきたわけであるが、最後に、3古墳の築造順序と古墳群について述べてまとめたい。

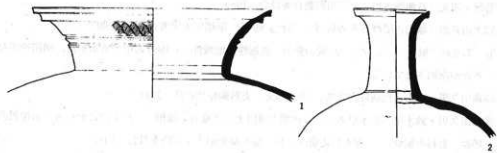
上述したように、埴輪、土器等の検討から、2号墳→南原古墳→1号墳の順が考えられる。2号墳は埴輪の検討から6世紀中葉頃の年代が考えられ、1号墳が土器の検討から6世紀末葉~7世紀前葉頃と考えられる。しかし、先にも問題点として触れたように、遺物の出土状況にやや不安な点は残る。また、埴輪の変遷案についても、伴出遺物の検討が資料的制約から十分でなく、今後の資料の増加を待ち、さらに検討していきたい。

ここまで古墳の年代的なことについてのみ紙面を費やしてきたが、最後に、古墳群全体についてみてみる。本古墳群において注目すべき点は、周溝内外に存在する土坑群である。残念ながら土坑からの出土遺物はなく、時期を断定することはできないが、1号墳・2号墳を中心に配されていることから、古墳群築造時期とほぼ並行かやや後出する時期の所産と考えられる。橋本氏はこの土坑の在り方を、「埋葬序列における血縁的、階層的な差異を表現」したものと指摘されている。また、周溝内の長方形の大型土坑であるが、前述したように、聖山公園2号墳や上原3号墳など、現時点では、宇都宮市南部周辺のみに見られる埋葬形態である。このことは、古墳の地域性を示す1つの指標となるのではあるまいか。今後の資料の増加をまち、さらに検討を続けていきたい。

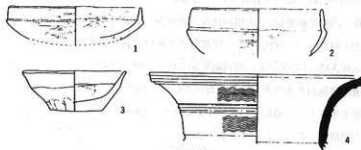
歴史的環境のところで見たように、本古墳群を含む周辺地域には、多数の古墳群が存在し、これらは、現時点のところすべて後期古墳と考えられる。また、周辺の集落遺跡に関しても、古墳時代後期以降の集落が目立つ。このような周辺の状況から考えて、本古墳群は、新たな道具と



1号墳



2号墳



高塚古墳



第37図 各古墳出土土器集成図

技術の導入により、未開拓地であったこの地を開墾し、「動産私有を基礎にし、その相対的自立の方向」を歩んだ人々の墓域の一部であったと考えられる。

註

- ① 石川均・森田久男・小森哲也「栃木県域における埴輪の諸問題」『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性—』1985
- ② 大沢伸啓「円筒埴輪について」『栃木県考古学会誌』第12集 栃木県考古学会 1990
- ③ 岩崎卓也ほか「摩利支天塚古墳」小山市教育委員会 1983
- ④ 大沢伸啓「馬飼いの人物埴輪について」『栃木県考古学会誌』第13集 栃木県考古学会 1991
- ⑤ 男性でも胸の表現がある例が、千葉県小貝川町城山1号墳出土の男性埴輪にあるとの御教授を橋本博文氏から戴いた。
- ⑥ 若松良一「3 人物・動物埴輪」『古墳時代の研究 9 古墳III 埴輪』雄山閣 1992
- ⑦ 鮎千葉県文化財センター「房総考古学ライブラリー6 古墳時代②」1992
- ⑧ 岩崎卓也・森田久男「小山市域の円筒埴輪」『小山市史研究』1 1978
- ⑨ 小森哲也「宇都宮市笹塚古墳出土の円筒埴輪の年代的位置づけ」『考古学』第2号宇都宮大学考古学研究会 1979
- ⑩ 石川均「宇都宮市塚山古墳群出土の埴輪について」『専修考古学』第1号 専修大学考古学会 1983
- ⑪ 小森哲也「栃木県内古墳出土遺物考(I)—鉄器の変遷—」『栃木県考古学会誌』第8集 1984
- ⑫ 秋元陽光「八龍塚古墳」上三川町教育委員会 1989
- ⑬ 水沼良造「塚山古墳群とその周辺」『古代』89号 早稲田大学考古学会 1990
- ⑭ 「第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷—普遍性と地域性—」1985の中で坂本和俊、増田逸明など各氏が指摘されている。
- ⑮ 森田久男「小山市民病院内古墳」『小山市史』史料編原始古代 1981
- ⑯ 森田久男・鈴木勝「栃木県における後期古墳出土の埴輪の様相—最下段における「低位置凸帯埴輪」資料の紹介—」『栃木県史研究』19 栃木県史編さん専門委員会 1980
- ⑰ 大川清「西赤堀孤塚古墳」日本家業史研究所 1987
- ⑱ 石塚久則ほか「塚廻り古墳群」群馬教育委員会 1980
- ⑲ 川西宏幸著「第四章 円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房 1988
- ⑳ 石部正志・斎藤恒夫・阿部知己「塚山古墳」『宇都宮市文化財年報』第8号 1992
- ㉑ 水沼良造「二 浅間塚古墳」『壬生町史』資料編原始古代・中世 1987
- ㉒ 鈴木一男「宮内北遺跡発掘調査報告書」小山市教育委員会 1985
- ㉓ 大川清ほか「栃木県壬生町上原古墳群」日本家業史研究所 1989
- ㉔ 塚本誠ほか「稲荷古墳群」宇都宮市教育委員会 1985
- ㉕ 水沼良造「七 亀の子塚古墳」『壬生町史』資料編原始古代・中世 1987
- ㉖ 塚本誠ほか「聖山公園遺跡1」宇都宮市教育委員会 1983

- ㊦岩崎卓也「関東地方東部の前方後円形古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館 1992
- ㊧田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1983
- ㊨中村浩ほか『陶器Ⅲ』助大坂文化財センター 1978
- ㊩梁木誠ほか『針ヶ谷新田古墳群』宇都宮市教育委員会 1983
- ㊪橋本進朗「栃木県の円墳」『古代学研究』123 古代学研究会 1990
- ㊫近藤義郎『前方後円墳の時代』日本歴史叢書 1983

图 版



1 調査風景 (西から)



2 1号墳確認状況 (西から)



3 1号墳全体セクション (南から)



4 1号墳セクション (東から)



5 1号墳セクション (西から)



1 1号墳箱式石棺天井部 (西から)



2 1号墳箱式石棺内 (北から)



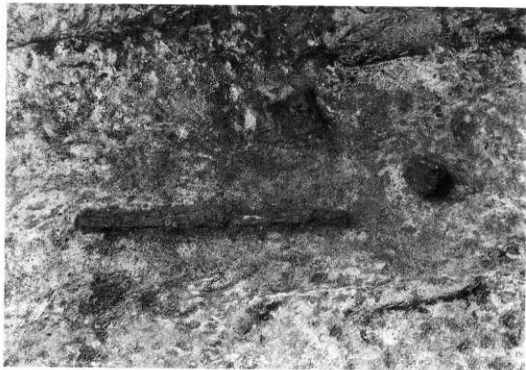
1 1号墳木棺墓室上土器出土状況



2 1号墳木棺墓室土状況



1 1号墳木棺室内直刀出土状況 (南から)



2 1号墳木棺室内直刀出土状況 (東から)



1 1号墳木棺墓完掘状況



2 1号墳完掘状況



1 2号墳埋土状況 (南から)



2 2号墳遺物出土状況 (南から)



1 2号墳完掘状況 (南から)



2 2号墳遺物出土状況 (南東から)



1 2号墳遺物出土状況（南西から）



2 2号墳形象埴輪出土状況（南から）



1 高形埴輪出土状況 (南から)



2 1号埴輪出土状況 (南から)



1 1号埴輪棺出土状況 (東から)



2 2号埴輪棺出土状況 (南から)



1 南原古墳全景 (西から)



2 南原古墳埋土状況 (西から)



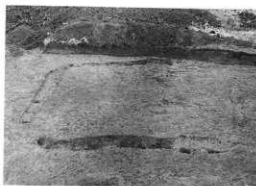
1 南原古墳遺物出土状況 (南から)



2 南原古墳周溝内土坑埋土状況 (西から)



3 南原古墳調査風景



4 方形溝状遺構 (東から)



5 2号墳周溝内土坑 (東から)



6 2号墳周溝内土坑 (南から)



1 1号土坑埋土状況 (南から)



2 2号土坑完掘 (南東から)



3 3号土坑埋土状況 (北から)



4 4号土坑完掘 (東から)



5 5号土坑埋土状況 (南から)



6 6号土坑埋土状況 (南から)



1 6号土坑完掘 (東から)



2 7号土坑埋土状況 (南から)



3 視察風景



1 1号墳出土土器

3



1



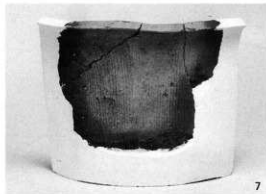
2 2号墳出土土器

2

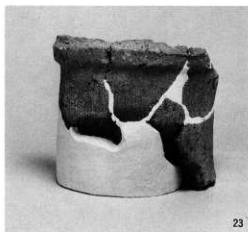
P L 15



3 1号墳木棺墓出土薙刀



1 2号墳出土埴輪

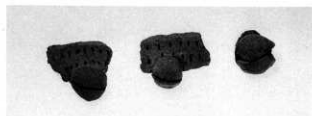




1 2号墳出土馬形埴輪



2 2号墳出土人物埴輪



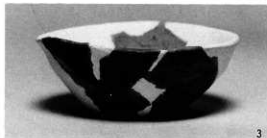
3 2号墳出土形象埴輪破片



1



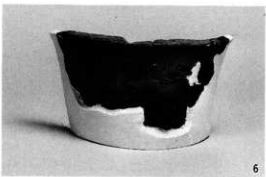
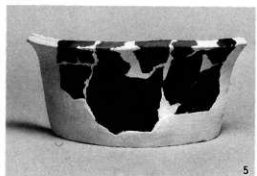
2



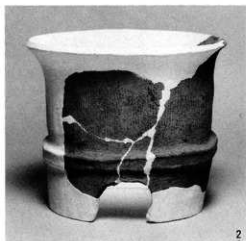
3



4 南原古墳出土遺物



1 1号埴輪棺



1
2 2号埴輪埴

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第30集

下桑島西原古墳群

平成4年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会文化課

(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (0286) 32-2765

印刷 朝陽堂印刷興業株式会社

(宇都宮市不動前1-3-35)

TEL (0286) 34-3421
